

電信 明治三十三年七月二十四日發
同 二十五日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第九二號

露國ハ歐部露西亞ヨリ撤兵五旅團砲兵十五隊工兵鐵道隊各一大隊ヲ遼東ニ派遣スルコトニ決シ其中「キエフ」工兵大隊ノ第三旅團及鐵道隊一箇大隊ハ「サイベリヤ」鐵道ニ依リ「ハバロヴスク」ニ向テ出發セリ其他ハ「オデッサ」ヨリ海路輸送セラルヘシ此等ノ軍隊ハ未タ動員セラレヌ且馬匹ヲ有セス滿州ノ「ハルビン」ニ向ツテ進軍中ノ「ニコリスク」「スンガリ」及「ネルチンスク」ノ三軍隊ハ目下ノ處ニテハ歩兵約十箇大隊ヨリ成ル

電信 明治三十三年七月二十四日發
同 二十五日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第九三號

滿州ニ於ケル排露運動ノ迅速ニシテ意外ノ蔓延ト同地方鐵道ノ比較的防備ナキ狀態カ露國ヲ促シテ歐露ヨリ急速大兵ヲ派遣セシムルニ至リタルハ本官電信第九十二號ヲ以テ具申セシ通リナレトモ右大兵全部ノ出發ハ運搬船ヲ得ルノ困難ナルカ爲メ著シク遲延スヘシ露國刻下ノ目的ハ右鐵道線路ノ安全ヲ保持スルニアルコト疑ナ容レスト雖モ此目的ヲ以テスル用兵ノ結果ハ露國ヲシテ完全永久ニ(滿州)ヲ管領セシムルニ至ルヘシ

電信明治三十三年七月二十六日發

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第九五號

「ランストルフ」伯ハ七月二十五日本官ノ問ニ對シ歐洲ヨリ臨時大軍隊ヲ派遣
スル準備ノ整ヒタルハ事實ナレトモ果シテ其全部ヲ派遣スルヤ否ヤハ形勢
ノ如何ニ依ル而シテ同伯ハ右形勢ノ速ニ融和センコトヲ希望スル旨ヲ告ケ
我國ハ現今北清ニ幾何ノ兵員ヲ有スルヤ且又新聞紙ノ報スル如ク更ニ尙派
遣セントスルヤヲ問ヒタリ本官ハ我混成師團ハ既ニ上陸セシヤ又帝國政府
ハ派遣軍隊ノ増加ヲ謀リツ、アルヤノ報道ヲ得タシ

電信明治三十三年七月二十七日發

在露 小村全權公使

青木外務大臣

第七九號

貴電第九十五號ニ關シテハ二萬二千ノ軍隊ハ既ニ清國ニ上陸シ尙目下將來
ノ危急ニ應スヘキ援兵派遣ノ準備中ナリ然レトモ右援兵派遣ハ外國軍ノ司
令官ト協議スヘキ任務ヲ以テ天津ニ特派セラレタル寺內陸軍中將ノ報告如
何ニ依ルヘシ

電信 明治三十三年七月二十五日發
同 二十七日着
青木外務大臣

第九六號

在露 小村全權公使

東清鐵道南部ノ形勢ニ關シ七月十九日附露國官吏ノ報告ニ依レハ大石橋停車場以北ノ線路及架橋材料并ニ機關車十四輛破壊セラレ雇員及護衛兵中ニ多數ノ被害者アリ大數ノ清兵營口、海城、熊岳城其他既成線路附近ノ箇所ニ集屯セリ清兵襲撃ノ狀態ハ正シク少數ノ露國分遣隊ヲ破リ其退路ヲ切斷センカ爲メノ謀計タルコトヲ表示セリ強勢ノ援兵ヲ發遣スルコト遲延スルトキハ益清人ノ勇氣ヲ添ヘ熊岳城及海城停車場ニ面スル市街ニ於ケル清人ノ群衆ヲ增多スルニ至ルヘシ清國ノ官兵ハ「クルップ」砲ヲ以テ集屯シ居レリト云フ

ト
タ
ハ
ヨ

共露帝

電信 明治三十三年七月二十八日發
同 三十日著

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一〇〇號

貴電第六五號ニ關シ本官ノ取調ヘ得タル所ニ據レハ露國政府ハ頃日二通ノ
回文ヲ在外同國代表者某等ニ發送シ其一通ハ在清聯合軍ノ指揮ニ關スルモ
ノニシテ同國政府ハ司令長官ノ問題ヲ在清外國軍司令官ニ放任スルコトヲ
指示シ他ノ一通ハ清國軍艦ヨリ攻撃ヲ受クルノ場合ニ於ケル聯合艦隊ノ指
揮ニ關スルモノ、由同國外務省ハ其他何等ノ回文ヲ發シタルコトナキカ如
シ新聞紙ノ屢次報道スル如ク大山侯ハ日本軍ノ指揮官トシテ渡清セラレン
トスルハ事實ナルヤ

外務省
青木外務大臣
小村全權公使
在露
回文
發送
聯合軍
指揮
關スル
問題
回文
發シタル
コトナキ
カ如シ
新聞紙
ノ屢次
報道スル
如ク
大山侯
ハ日本
軍ノ指
揮官ト
シテ
渡清セ
ラレン
トスル
ハ事實
ナルヤ

ト
務
目

電信 明治三十三年七月二十八日發
同 三十日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一〇〇號

貴電第六五號ニ關シ本官ノ取調ヘ得タル所ニ據レハ露國政府ハ頃日二通ノ
回文ヲ在外同國代表者某等ニ發送シ其一通ハ在清聯合軍ノ指揮ニ關スルモ
ノニシテ同國政府ハ司令長官ノ問題ヲ在清外國軍司令官ニ放任スルコトヲ

公參照

右大臣兼外務大臣小村全權公使ニ對シテ
清國義和團事件本文續送付ル内ヨリテ
騰寫ス

電信 明治三十三年七月十七日發

在露 小村全權公使

青木外務大臣

才六五號

露國政府ハ近頃清國事件ニ關シテ回文ヲ在外露國大使ニ送ル趣

外務省

聞知セリ據聞ノ上至急其要點ヲ電報セウレタシ

電信 明治三十三年七月三十一日發

在露 小村全權公使

第八五號

貴電第一〇〇號ニ關シ大山侯ノ渡清ハ事實ナラス

青木外務大臣

出

七月三十一日

電信 青木外務大臣

申 在露公使

青木外務大臣。大山侯渡清ノ件。四電

電信 明治三十三年七月三十一日發
同 八月一日着

青木外務大臣

第一〇二號

在露 小村全權公使

清國事變ニ關スル英國青冊ヲ「ロイタル」電報ノ摘要シタル所ニ依レハ日本國
ハ英國政府ヨリ財政補助ノ保證ヲ得テ援兵ヲ派遣スルコトニ決シタルカ如
キ觀ヲ呈セリ本官ハ右ノ如キ記事ハ誤解ヲ生スヘキヲ恐ル而シテ亦其中ニ
日本國ハ其行動ノ露國ト衝突ヲ生スルニ至ラサルヘシトノ保證ヲ得ンコト
ヲ主張セリト記載セラル

電信 明治三十三年八月六日發
同 九日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一〇九號

八月四日發布ノ勅令ニ依レハ極東事件ノ爲メ臨時支出ヲ要スルヲ以テ歐洲貿易品中其國定稅率ヲ増加スルノ止ムヲ得サルニ至リタリト云ヒ其増稅ハ現在ノ關稅ヲ一割ヨリ五割迄増加スルコト、ナレリ而シテ地氈及磁器ニ對シテハ三割ヲ増シ絹物、陶器及象牙細工ニ對シテハ一割ヲ加ヘタリ尤モ歐洲露西亞ニ輸入スル其他ノ日本品ハ稅率變更ノ爲メ影響ヲ受ケス右勅令ハ即日實施セラレタリ

電信 明治三十三年八月十日發
同 十一日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一一四號

本官電信第九十二號ヲ以テ報告シタル露國兵ヲ搭載シタル汽船ニシテ八月二日迄ニ「ナデッサ」ヲ出發シタルモノ左ノ如シ

七月二十七日「サラトフ」號ニテ士官兵卒合計一千五百八十八人

七月三十日「キエブ」號ニテ同一千三百六十二人

八月一日「ナデッサ」號ニテ同約一千四百人

八月二日「ニコラス二世」號ニテ同約一千人

以上ノ軍隊ハ在「ナデッサ」第四旅團ニ屬スルモノナレトモ其中「セバストポル」ヨリ派遣セラレタル野戰砲兵一大隊及要塞砲兵二中隊アリ其目的地ハ旅順口ナリ

ト
タ
タ
タ

電信

(明治三十三年八月十五日日本邦駐露國公使ヨリ青木外務大臣ニ交付セシモノナリ)

29 Juillet (11 Aout). Nous avons reçu de notre Ministre à Pékin, Mr. de Chers, un télégramme chiffré nous informant que l'état de siège continue et que les assiégés ont de la difficulté à se procurer les vivres nécessaires; il résulte aussi de ce télégramme que le Gouvernement Chinois a proposé aux représentants étrangers de se transporter temporairement à Tientsin, mais que les Ministres ont décliné cette proposition en l'absence de garanties sérieuses pour leur sécurité. A la suite de ce télégramme je me suis empressé, d'ordre de sa Majesté l'Empereur, de faire des représentations par l'entremise du Ministre de Chine résidant à St.-Petersbourg que j'ai chargé d'informer, par le télégraphe, le Tsunli-Yamen que le Gouvernement Impérial estime un pareil état de choses comme ne pouvant être toléré et rend les Princes et l'Empereur Chinois responsables de la manière la plus grave pour la moindre infraction à l'inviolabilité du personnel diplomatique Russe, et des sujets russes auxquels, tant qu'ils sont à Pékin, doivent être accordées les plus grandes facilités. Pour ce qui est du départ de Pékin des Représentants étrangers et de tous les étrangers qui sont assiégés avec eux et dont le nombre est considérable, le Gouvernement Impérial est d'avis qu'on ne pourrait consentir à leur transfert à Tientsin que si les autorités chinoises prendront toutes les mesures nécessaires pour les protéger en route contre toute éventualité. Dans ce cas il faudrait prévenir le Gouvernement chinois que, puisque c'est sur ses propres instances que les Ministres se décident à quitter la capitale, aucune infraction à leur inviolabilité ne sera considérée par les Puissances comme excusable ou justifiable; il serait nécessaire, en même temps, d'exiger que le Tsunli-Yamen fût sa voir en détail par quel moyen il aurait l'intention de garantir la complète sécurité du voyage des Représentants étrangers de Pékin à Tientsin. Si ces moyens semblaient insuffisants aux Puissances, celles-ci pourraient, peut être proposer d'un commun accord au Gouvernement Chinois d'envoyer à Pékin un détachement international special, sous pavillon blanc ou sous un autre signe de convention, qui aurait exclusivement pour but de servir aux Représentants étrangers d'escorte sûre pendant leur voyage vers Tientsin.

電信 明治三十三年八月二十日發
同 二十二日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一二二號

本官電信第百十四號ニ關シ其後出發シタル運漕船、其行先及搭載兵數ハ左ノ如シ

八月八日	「モスコウ」號	千百五十五人	旅順口
同	「チカケエグロ」號	八百人	浦潮斯德
八月十五日	「ノルドアメリカ」號(汽船)	千二百五十人	同
八月十六日	「ケルソン」號	千六百人	旅順口

右兵員ハ「オデッサ」第四旅團及「ヴィルナ」第五旅團ニ屬シ工兵一中隊ヲ包有ス
本官電信第九十二號記載ノ五旅團ノ一ナル「ワルツァ」第一旅團ハ八月十四日追テ沙汰アル迄ハ東亞ヘノ出發ヲ猶豫スヘキ旨ノ命ヲ受ケタリ右ハ滿州ニ於ケル兵事上ノ必要ハ曩ニ歐洲ヨリ派遣セントシタルカ如キ大軍ヲ需用セサル事實アルニ職由スルコト疑ヲ容レサルト同時ニ本官ハ財政上ノ事情及相當ノ運漕船ヲ得ルノ困難ハ露國政府ノ決意ニ與リテ力アリタリト信ス

ト 各 八三

電信 明治三十三年八月二十二日發
同 二十三日着

青木外務大臣

第一二三號

在露 小村全權公使

極東ニ向ケ「オデッサ」出發スルノ準備中ナリシ運漕船ノ大部ハ八月十七日更ニ告知ヲ受クル迄其出發ヲ見合ハスヘキ旨ヲ命セラレタリ是レニ因リ露國カ本官電信第百二十二號所載第四及第五旅團ノ外最早極東ヘ軍隊ヲ派遣セサルコトヲ知ルヘシ

電信 明治三十三年八月二十八日發
同 三十日着

青木外務大臣

第一一三號

在獨 井上全權公使

「シーボールド」ヨリ左ノ通り

「ギアクタ」附近ニ在ル「ベルリネル」ターゲブラ「ト」新聞臨時通信者ノ報道ニ依レハ露國ノ軍備ハ甚タ著大ナルモノニシテ西比利亞ニ於ケル動員ハ八月十日ヲ以テ完結シ而シテ其動員ニ係ル露兵ハ十八萬七千人ナル由且右通信者カ武官ヨリ聞込ミタル所ニ依レハ既ニ本年五月中一千乃至一千四百ノ兵ヲ載セタル汽車日々「イルコク」ヲ通過セリト又清國々境ニ於ケル露兵ノ總數ハ八萬人ト推算セラレ其中五萬人ハ外國人及日本人所在地附近ノ沿岸地方ニアリト云フ此事實ハ特ニ該通信者ノ注意ヲ惹キタルモノナリト云フ

電信 明治三十三年八月二十九日發
同 三十日着
青木外務大臣

在米 高平全權公使

第四七號

在華盛頓露國代理公使ハ國務卿代理ト長時間ノ面會ヲ遂ケ新聞紙上ニ左ノ如ク掲載スルコトヲ承認セリ

外國電報ハ露國カ清國ヲ犧牲ニ供シテ自國ノ版圖ヲ擴張セントスル利己的意志ヲ包懷スル旨ヲ唱道スト雖モ露國ハ清國ノ分轄又ハ割地ニハ反對ナルコトヲ公言スルヲ得ヘシ露國ハ清國ノ平和ヲ希望スルモノニシテ其行動ハ此希望ヲ遂行スルニ適合スル様注意ヲ凝セリ清國ハ露國ノ獨力ニ依リ若クハ其政治家ヨリ出ツル所ノ言議ノ爲メニ分割セラル、コトナカルヘシ牛莊ニ於ケル露國ノ行動ニ關シテハ露國カ同市ヲ占領シ居ルモ毫モ聯合軍ノ大沽ヲ占領スルト異ナルコトナク秩序恢復ノ必要ニ出テタルモノナリ該市ハ攻撃セラレ其害露國租借地ニ於ケル利益ニ延及セントス依テ西比利亞鐵道ノ東清延長線ヲ保護スル爲メ占領セラレタルモノニシテ露國ニ於テ之ヲ領有スルハ其清國ヲ犧牲ニ供シ若クハ現ニ行動中ノ聯合列國ノ利益ニ反シテ領土ヲ獲得スルノ意志ヲ有セサルモノナルニ由リ平和ノ妨碍タラサルヘシ云々

ト
務
目

書信 明治三十三年七月四日附
同 八月三十日着
青木外務大臣
機密第二六號

在露 小村全權公使

六月二十四日露國官報掲載政府宣言書

最初清國ヨリ不穩ノ報道アルヤ帝國政府ハ直ニ北京駐劄ノ公使ヲ經テ清延諸大臣ニ就キ我露西亞帝國ト遙遠ナル境ヲ接スル清國ノ保安立序ヲ謀ランカ爲メ此際非常ノ手段ヲ執ラレンコトヲ要求シ同時ニ公使ギールスニ命令シテ動モズレハ在留外國民ニ對シ暴民蜂起セントスル危機一髪ノ形勢ニ關シ總理衙門ノ注意ヲ促サシメ愈紛擾湧發ノ場合ニ於テハ之ニ對スル一切ノ責任ハ在延ノ諸大臣ニアルヘントノ意ヲ申込マシメタリ然ルニ悲ムヘシ清國地方長官等ノ怠慢ハ唯暴徒ノ罪行ヲシテ増長シ易カラシメ隨テ政府軍隊ノ中ニモ暴徒ニ同情ヲ表スルモノアルニ至ラシメタルヲ以テ暴徒ノ蜂起ハ日々勢ヲ加ヘテ蔓延シ五月二十五日六月七日暴徒ハ遂ニ東宜門ニ在ル正教寺院ヲ燒拂ヒ進ンテ露國宣教院ヲモ烏有ニ歸セシメントセリ斯カル有様ニシテ北清ニ在留スル露國臣民ノ生命財産ハ甚タ危險ナル境遇ニ陥リタルニ我公使ノ配下ニハ僅ニ七十五名ノ陸戰隊アルノミナリ前述ノ次第ナルヲ以テ最早此上ハ猶豫スヘキニアラス帝國政府ハ清國暴徒ノ罪行ニ對シ非常ノ手段ヲ用井テ在北京ノ露國代表者ヲ保護シ露國臣民ノ生命財産ヲ救ハサルヲ得ス

去レハ帝國政府ハ皇帝陛下ノ勅令ニ據リ豫メ關東州長官ニ命シテ四千ノ兵ヲ準備シ我在北京公使ヨリ要求アリ次第出兵ノ仕度ヲ爲サシメ置キシカ其後我公使館トノ通信ハ全ク絶ヘ剩ヘ上海ヨリハ暴徒等外國公使館ヲ攻撃セシカ爲メ北京附近ニ集合セシトノ報道アリテ事甚タ急ナルヲ以テ海軍中將「アレキセーエフ」ハ命令ヲ受ケテ前線四千ノ兵ヲ直ニ發送スルコト、ナレリ而シテ我二千ノ先發野戰隊ハ五月三十日(六月十二日)始メテ天津ニ到着セシカ此時ハ既ニ天津北京間ノ電線鐵道ハ悉ク破壞シアリタリ天津近傍ノ暴徒等ハ天津市街ニ火ヲ放テ地方總督ノ家ヲ燒キ外國居留地ニ向テ二回ノ襲撃ヲ試ミタレトモ我野戰隊ニハ幸ニ死傷ナクシテ大ニ暴徒ヲ撃退セリ暴徒等ハ我露國及諸外國ノ上陸兵ニ對シ兵站ノ供給及後援ヲ絶タンカ爲メ轉シテ大沽ノ要塞ヲ占領セリ

斯カル有様ナレハ各國連合軍ハ先ツ海陸交通ノ安全ヲ得ンカ爲メ暴徒ニ逼リテ大沽ノ要塞ヲ交付セシムルノ必要ヲ認メタリ然ルニ六月三日(六月十二日)ノ夜突然暴徒ヨリノ發火ニ基キ遂ニ翌四日(六月十三日)ニ亘リタル大沽ノ攻撃トナレリ右攻撃ノ結果ハ官報ニ掲載シタルカ如ク海軍中將「アレキセーエフ」ヨリノ電報ニ由リテ明ナリ

既ニ大沽要塞ヲ占領シタルハ我露國派遣軍隊ハ進ンテ帝國公使館ト直接交

通ノ聯絡ヲ付ケ露國臣民保護ノ任務ヲ全フシ得ヘシ

以上述ヘントコロニ由リ我露國軍隊ハ隣邦ニ入ルモ清國ニ對シ何等敵視加害ノ目的ヲ有セサルコト明ナルノミナラス目下危急ノ事件アルニ際シ我軍隊ノ友邦ニアルハ却テ北京政府ノ爲メ暴徒ノ鎮定ヲ助ケ清帝國ノ保安立序ヲ速カナラシムルノ功アルヘシ

六月十四日「ノオチエ、ウレーミヤ」社説

英國新聞ハ「タイムズ」ヲ始メトシ今回ノ支那事件ヲ以テ罪ヲ我露國ニ歸シ甚シキハ我露國ヲ以テ清國暴徒ノ指揮者ナリト唱道スルモノアリ無禮モ亦極マレリト謂フヘシ加之前ニハ日本ヲ煽動シテ我ニ當ラシメントシ今ハ又北米合衆國ヲ慫慂セントス要スルニ久シク力ナ南亞ニ費シタル英國ハ亞細亞ノ中原ナル清國ニ於テ我露國ト相角スルノ餘力ナキヲ以テ隱然蓋シ漁夫ノ利ヲ得ント欲スルニ外ナキナリ

元來火中ノ栗ヲ拾フテ之ヲ與フルモノアルヲ待ツハ英人狡猾手段ノ常套ナレハ敢テ怪シムニ足ラサレトモ今回支那事件ノ漸ク社會ヲ騒カシ事體容易ナラサルヲ見ルヤ英國新聞ハ頓ニ語調ヲ轉シ我露國ニ頼テ以テ事ヲ成サント欲シ或ハ支那ニ於ケル歐洲ノ利益ヲ救ハンニハ唯露英合體ノ運動ニアルノミナリト云ヒ或ハ今回支那事件ヲ始メトシ露英相合體シテ運動シ將來互

ニ相知リテ隔意ナキニ至ラハ此上モナキ兩國ノ仕合ナラン杯巧言ヲ弄シテ我ヲ誘ハントス昨日マテ敵視シテ我ヲ惡ミ野蠻視シテ我ヲ信セサリシ英人ノ彪變ハ之ヲ大智ト云ハンカ寧ロ卑劣ト評スルノ外ナカルヘシ固ヨリ露英兩國民ノ間ニハ區々筆舌ノ以テ瘼スル能ハサルモノアルナリ見ヨ「ソーズベリ」侯ハ伯林會議ニ於テ何事ヲ爲セシカ「チエムバーレン」君ハ國會議事堂ニ於テ切言我露國ヲ侮辱シタルニアラスヤ抑モ英人ハ我露國ハカ既ニ此等ヲ忘却シタリト思惟スルナランナレドモ露人ハ英人カ昨日迄敵視シ野蠻視シテ罵詈訾弄シタル已ノ言ヲ忘レタルカ如ク能ク忘却スルモノニアラサルナリ

右兩國ノ關係ハ兎モ角トシテ今回支那事件ニ關シテハ勿論我露國モ清國ニ於ケル歐洲一般ノ利益ヲ救ハスト云フニハアラサレトモ我露國ノ清國ニ於ケル關係ハ歐洲各國ノ清國ニ於ケルモノト同日ニ之ヲ論スル能ハス歐洲各國ハ遠ク海洋ヲ隔ツルヲ以テ航シ來テ利ヲ拾フモ亦航シ去テ一切ノ關係ヲ斷ツモ自由自在ナレトモ我露國ハ然ラス延長四千露里餘ノ境ヲ交ヘテ帝國ノ隣帝國ニ接スル長關係ハ海ニ航シテ利ヲ求ムル商估ノ得意先視スル類ニアラサルナリ清國ハ能ク知ルナラン我露國カ未ダ曾テ清國ニ阿片ヲ輸送セサリシコトヲ去レハ今回我露國カ各國ト共ニ運動スルモ其運動ノ範圍ハ自

ラ明ナルヘク即チ支那ニ於ケル歐洲一般ノ利益ハ清國及清國臣民ノ利益ニ相反セサル限ニ止マルモノニシテ若シ此範圍ヲ脱シテ彼阿片輸送者ノ利益ニ至ル迄ヲ保護スルノ手段ニ出テナハ遂ニ共同運動ニ加ハルノ方針ヲ誤マリ我ノ利益ニ反クモノト云フヘキナリ

六月三十日「ノオチスナ」社説

清國ニ於ケル各國軍隊ハ共同ノ下ニ運動スレトモ最モ重ナル役割ニ當レルモノハ我露國ノ軍隊ニシテ大沽要塞ヲ占領シ天津ヲ畧シ進ンテ「セイムール」一隊ヲ援助シタルカ如キ實ニ我露國軍隊ノ名譽ナルト同時ニ多クノ士官兵卒ヲ犠牲ニ供シタリ斯ノ如ク我軍隊ハ大ニ奮戦スレトモ外國ノ政治家及新聞紙等ハ曾テ我軍隊ノ行爲ヲ贊セサルノミナラス却テ其功ヲ抹殺セントスルモノアリ英國外務次官「ブロードリク」氏ノ如キハ抹殺者ノ張本ト云フヘケレハ氏ノ口舌未ダ乾カサルニ當リ充分ノ駁撃ヲ施シテ後日共同者カ露國軍隊ノ功果ヲ沒セサル様注意シ置クノ必要アリ勿論單ニ言語ヲ頼ムカ如キハ多ク無効ニ屬スルヲ以テ各國愈報償問題提出ノ際ニ當リテハ相當ノ場所ヲ占領シ居リテ動カサルノ覺悟既ニ今日ヨリ肝要ナリトス

露國ハ固ヨリ清國ノ分割ヲ欲スルモノニアラス清國ニ平和ヲ保チ秩序ヲ維持セシムルヲ以テ最重ノ目的トスルモノナリ併シナカラ此目的ヲ達セシニ

ハ到底露西亞一國ノ能クストコロニアラサレハ吾人カ常ニ唱道スルカ如ク此際適當ナル同盟國ヲ選ムノ必要アルヘシ此同盟國ハ日本ヲ措テ他ニ求ムルヲ得サルナリ近來日露兩國ハ朝鮮支那等ニ於テ往々小爭論ヲ惹起シタレトモ元來朝鮮及清國ニ於ケル日露ノ利益ハ一見相反スルカ如クナレトモ仔細ニ之ヲ觀察スレハ決シテ然ラサルヲ以テ一旦此兩國カ相同盟シ中原ニ蒞マハ充分ノ處置ヲ施スヲ得テ日露兩國ニ取リテハ又得ヘカラサル好果アラシ日本ハ強大ナル海軍國ナルト同時ニ我露國ハ又強大ナル陸軍國ナルヨリ察スルモ日露ノ同盟ヨリ彼我好都合ノ同盟ハ他ニ之ヲ得難カルヘシ日本ハ今日其人口大ニ増殖スルヲ以テ到底永ク狹隘ノ版圖ニ安ンサルヲ得サルコトハ明瞭ナル次第ナレハ土地ヲ得シカ爲メニハ早晚隣國トノ衝突ハ免カルヘカラス倍テ斯カル場合ニ於テハ日本ハ何レノ方面ニ向テ事ヲ起サハ易ニシテ且利益ナルカ英ト爭ハシカ露ト爭ハシカ將又露ヲ友ニセンカ英ト手ヲ連ネシカ利害容易ニ判シ難カルヘシト雖モ抑モ我露國ヨリ之ヲ謂ヘハ勿論我露國ハ日本カ久シク狹隘ナル版圖ニ踰越スルヲ欲セサルモノナリ
今回支那事件ニ關シテハ日本ハ今日迄非常ニ慎重ノ態度ヲ執レルモノ、如シ最近東京ヨリノ通信ニ依レハ日本政府ハ必要ノ時機ニ備フルカ爲メ一師團ノ動員ヲ爲スコトニ決シタリトアリ此處置タルヤ暗ニ能ク我露國政府カ

沿黑龍軍區ノ動員ヲ行ヒシト相響應スルモノト云フヘシ斯カル步調ヲ以テ推シ行カハ此兩帝國ハ各國ト共同運動ノ範圍ヲ離ル、必要ナクシテ互ニ其本旨ヲ達スルヲ得ヘケン
今回ノ事件愈治マリテ清國ト各國間ノ關係ヲ調理スルニ當リテハ一般ノ損害ニ對スル報償ハ勿論各國銘々ノ損毫ニ對シテモ之ヲ要求スルコトナルヘク露國ノ如キハ軍隊ニマレ臣民ニマレ比較的多クノ損害ヲ被リタレハ報償モ隨テ多カラサルヘカラストシテ倍テ右各國ノ報償ニ關スル清國ノ約束遂ニ賴ムニ足ラサル曉ニハ前顯日露兩國カ動員シタル軍隊ハ安寧秩序ノ保護者トシテ永ク清國內ニ駐屯セシメテ可ナリ

電信 明治三十三年八月二十四日發
同 三十日着

青木外務大臣

在獨 井上全權公使

第一〇六號

八月二十三日「シーボルト」ヨリ左ノ通り

「テルニ」シエ、ツアイツング新聞ハ露國ノ牛莊占領ニ關シ左ノ如ク論セリ
露國人ハ(不明)官吏ノ不在ナルカ爲メ稅關事務ヲ管理スルト雖モ此事實ハ
露國カ去ル七月ヲ以テ發表シタル條約港ノ占領ハ單ニ軍事上ノ必要ニ由
ルヘシトノ宣言ヲ變更スルモノニアラス又清國非分割ヲ主張セル露國ノ
宣言ハ列國殊ニ露國ノ友邦タル米國(?)ノ承認スル所トナレリ若シ豫期ニ
反シテ何レノ邦國ニテモ牛莊ノ占領ヲ誤認スルモノアルトキハ露國ハ清
國ノ非分割ニ關シ明晰且忠實ニ案定シテ公表シタル主義ヲ指示ミ容易ニ
其誤認ヲ辦解スルヲ得ヘシ云々
以上ハ正シク我等ノ所說ニ對シ其筋ノ鼓吹ヲ受ケテ答辨シタルモノナルヘ
シ

電信 明治三十三年八月二十五日發
同 三十日着

青木外務大臣

在獨 井上全權公使

第一〇九號

「シーボルト」ヨリ左ノ通り

八月十九日發兌「ノヴスナ」新聞ハ左ノ如ク論シタリ
露國ハ黑龍江ノ右岸ヲ征服シタルニ依リ一版圖ヲ領有スルニ至レリ同地
方ハ一般ノ歷史上永ク露國ノ有ニ歸セラレタルモノナリ今ヤ黑龍江ハ露
國ノ領河トナレリ初メ露國ハ毫モ此舉ニ出ツルノ希望ナカリシト雖モ清
國政府ハ靜平ノ時ニ際シ俄然詐謀ヲ以テ我ヲ襲撃シタルニ依リ我國ハ其
賠償トシテ征服地方ヲ占有スルノ權利ヲ有ス而シテ我黑龍江占領ハ文明
世界ニ對シ(一語不明)ヘノ門戸ヲ開キタルモノト云フヘシ云々
以上ノ所論ハ黑龍江右岸ノ占領ハ同江全部ヲ露國ニ合併スルノ大業ヲ確
定シタルモノナリト云ヘル黑龍江總督「グロデコフ」將軍ノ露國陸軍大臣ニ
送リタル電報ニ符合シ尙露國ハ滿州ニ關シ特別ニ講和談判ヲ爲サンコト
ヲ希望スト云ヘル「タイムス」通信員ノ報道ト一致スルモノナリ

電信 明治三十三年八月二十七日發
同 三十一日着

青木外務大臣

第一一〇號

在獨 井上全權公使

「シーボルト」ヨリ左ノ通り

韓國カ事變ニ際シ日本國ニ保護ヲ請ヘリト云ヘル報道ニ關シ「スタンダード」新聞ニ轉載セラレタル露國新聞「ラシア」ノ論說左ノ如シ
韓國ハ露國ノ利害關係ヨリ之ヲ觀テ宜シク全然獨立スルカ將タ露國保護ノ下ニ在ルヘキ邦國ナリ次キニ日本國ハ島國トシテ留マラサルヘカラス露國ハ斷シテ日本國カ清國ノ本土ニ於テ寸壤ヲモ攬收スルコトニ同意セサルヘシ若シ日本國ニシテ韓國又ハ北清ニ於テ版圖ヲ收得スルトキハ露國ノ極東ニ於ケル政策ノ全部顛覆スルニ至ルヘシ赤間關係約ハ歐洲ニ對シ露國カ孤立セルモノニアラスシテ獨佛兩國ノ贊助ヲ得タルコトヲ證明シタリ而シテ露國ハ再ヒ右等諸國ノ援助ヲ受クルト否トニ拘ハラズ今ヤ外部ヨリ無形又ハ有形ノ援護ヲ求メスシテ單獨事ニ當ルノ用意アリ東京ヨリノ最近通信ハ英國ノ瓦斯ヲ以テ充滿セル試驗輕氣球ニ過キサルコトヲ信セントス露國ハ豫メ覺悟シテ準備スル所アリ願クハ東京通信ノ虛偽ナランコトヲ否ラサレハ北京上海ニ於ケル目下ノ紛雜ハ更ニ百倍ヲ重ヌルニ至ルヘキナリ

電信 明治三十三年八月二十九日發
同 三十日着

青木外務大臣

第四七號

在米 高平全權公使

在華盛頓露國代理公使ハ國務卿代理ト長時間ノ面會ヲ遂ケ新聞紙上ニ左ノ如ク掲載スルコトヲ承認セリ

外國電報ハ露國カ清國ヲ犧牲ニ供シテ自國ノ版圖ヲ擴張セントスル利己的意志ヲ包懷スル旨ヲ唱道スト雖モ露國ハ清國ノ分轄又ハ割地ニハ反對ナルコトヲ公言スルヲ得ヘシ露國ハ清國ノ平和ヲ希望スルモノニシテ其行動ハ此希望ヲ遂行スルニ適合スル様注意ヲ凝セリ清國ハ露國ノ獨力ニ依リ若クハ其政治家ヨリ出ツル所ノ言議ノ爲メニ分割セラル、コトナカルヘシ牛莊ニ於ケル露國ノ行動ニ關シテハ露國カ同市ヲ占領シ居ルモ毫モ聯合軍ノ大沽ヲ占領スルト異ナルコトナク秩序恢復ノ必要ニ出テタルモノナリ該市ハ攻撃セラレ其害露國租借地ニ於ケル利益ニ延及セントス依テ西比利亞鐵道ノ東清延長線ヲ保護スル爲メ占領セラレタルモノニシテ露國ニ於テ之ヲ領有スルハ其清國ヲ犧牲ニ供シ若クハ現ニ行動中ノ聯合列國ノ利益ニ反シテ領土ヲ獲得スルノ意志ヲ有セサルモノナルニ由リ平和ノ妨碍タラサルヘシ云々

原

電信 明治三十三年八月三十一日發
九月一日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

第一三一號

ラ「ムスドルフ」伯ハ露國駐劄英國大使ニ語ルニ露國カ牛莊ヲ占領シタルハ只
一時ノ措置ニ外ナラスシテ若シ事情ノ許ストキハ直ニ之ヲ撤回スヘキ旨ヲ
以テセリト云フ又本官ノ聞ク所ニ依レハ露國ハ間モナク公然タル宣言ヲ以
テ其永久ニ滿州ヲ占領スルノ意志ナキコトヲ明示スル趣ナリ

電報
明治三十三年九月一日日本駐劄露國公使ヨ、青木外務大臣ニ送付セシモノ

電信

(明治三十三年九月一日日本駐劄露國公使ヨ、青木外務大臣ニ送付セシモノ)

Des l'origine des troubles en Chine le Gouvernement Impérial, ainsi qu'il l'a déclaré à plusieurs reprises, avait eu en vue d'atteindre les deux buts suivants :

1. Préserver le Représentant Russe à Pékin et défendre les sujets Russes contre les desseins criminels des insurgés Chinois ;
2. Prêter assistance au Gouvernement Chinois dans sa lutte contre l'insurrection, afin de rétablir au plus vite dans l'Empire un ordre de choses légal.

Lorsque, ensuite, toutes les Puissances intéressées décidèrent d'expédier dans, un but analogue, des troupes en Chine, le Gouvernement Impérial proposa d'adopter, par rapport aux événements Chinois, les principes fondamentaux suivants :

1. Maintien de l'accord général contre les Puissances.
2. Conservation de l'ancien ordre politique en Chine.
3. Exclusion de tout ce qui pourrait mener à un partage de la Chine.
4. Rétablissement, par un effort commun, du Gouvernement central légal à Pékin, lequel pourrait lui-même assurer l'ordre et la tranquillité dans le pays.

Un accord complet fut établi sur tous ces points presque entre toutes les Puissances. Ne poursuivant aucun autre dessein, le Gouvernement Impérial est resté, et entend rester strictement fidèle au programme susmentionné. Si le cours des événements, comme l'agression des insurgés contre nos troupes à New-chwang et les actes hostiles des chinois sur notre frontière, entre autres les bombardement, sans provocation aucune, de Blagovestchensk, a déterminé la Russie à occuper New-chwang et à introduire des troupes Russes en Mandchourie, ces mesures temporaires provoquées exclusivement par la nécessité de repousser les agressions des insurgés, ne témoignent nullement de plus égoïstes quelconques auxuels la politique du Gouvernement Impérial reste complètement étrangère. Dès qu'un ordre stable sera établi en Mandchourie et toutes les mesures nécessaires seront prises pour la sauvegarde de la ligne fermée, dont la construction est formellement garantie par une convention spéciale avec la Chine touchant la concession accordée à la société du chemin de fer de l'Est Chinois, la Russie ne manquera pas de retirer ses troupes des confins chinois, si cependant elle n'en est pas empêchée par la manière d'agir des autres Puissances. Il est évident que les intérêts possédés par les Gouvernements étrangers et les sociétés inter-

nationales tant dans le port commercial ouvert de New-chwang, que sur la ligne du chemin de fer, rétablis par les troupes russes, restent intacts et seront complètement sauvegardés.

L'occupation de Pékin ayant été effectuée, en vue des circonstances modifiées, plus vite qu'on ne pouvait s'y attendre, la première et la plus importante des tâches, posées par le Gouvernement Impérial, se trouve atteinte : les Représentants des Puissances avec tous les étrangers assemblés ont été délivrés. L'accomplissement de la seconde tâche, c. à d. l'aide à prêter au Gouvernement central légal pour le rétablissement de l'ordre et des rapports réguliers avec les Puissances, présente pour le moment des difficultés par suite du départ de la capitale chinoise de l'Empereur, de l'Impératrice-Régente et du Tsemhi-yamen. Dans ces circonstances, le Gouvernement Impérial ne voit aucune raison pour les Légations étrangères, accréditées auprès d'un Gouvernement absent, de continuer à rester à Pékin, et pour sa part, il a l'intention de rappeler à Tientsin son Ministre, Mr. de Giers, avec tout le personnel de la Légation ; jusqu'à l'endroit indiqué ils seront accompagnés par les troupes russes, dont la présence à Pékin se trouve ne plus avoir de but en vue de la ferme intention, déclarée à plusieurs reprises par la Russie, de ne point dépasser les limites de la tâche qu'elle s'était posée dès le début. Mais aussitôt que le Gouvernement légal chinois aura de nouveau pris les rênes du pouvoir et aura nommé des Représentants munis des pleins pouvoirs nécessaires, le Gouvernement Impérial ne manquera pas de nommer de son côté, d'accord avec tous les Gouvernements étrangers, des Plénipotentiaires et de les diriger sur l'endroit qui aura été choisi pour les futurs pourparlers. Veuillez informer de tout ce qui précède le Gouvernement auprès duquel vous êtes accrédités ; nous aimons à espérer qu'il partagera complètement notre manière de voir.

電信 明治三十三年九月一日發
同 二日着
青木外務大臣

第一三三號

在露 小村全權公使

九月一日刊行官報ヲ以テ清國事件ニ關スル露國ノ態度及其滿州ニ於ケル舉
措ヲ説明シタル訓令書ノ公表アリ右本文ハ閣下ニ於テ既ニ日本國駐劄露國
公使ヨリ接受セラレタルコト、信ス

は、
國、
益、
本、
多、
少、
の、
後、

ト
務
ハ
ヨ

書信 明治三十三年八月十四日附
九月二十六日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

送第四三號

本月二日ノ半官報ノオチエウレミヤニ於テ今回ノ支那事件ニ付露國ノ清國ニ於ケル關係ヲ説キ充分ノ兵ヲ滿州ニ入レテ徐ニ滿州鐵道ノ完成ヲ謀ルヘキ趣意ノ論説ヲ掲載候ニ付御參考ノ爲メ左ニ之ヲ抄譯差進候

今回ノ清國事件ニ於テ我ニ最モ必要ナルモノハ鎮靜ナリ我露國ニ於テハ暴動ノ鎮靜以外ニ何等收利ノ欲望アラズ我露國カ目下絶東ニ有スルモノハ無論莫大ノ價ヲ拂フテ之ヲ得タルモノナルモ今日又斯カル價ヲ投シテ絶東ニ得ル所アル乎吾人ハ之ニ對スル好形勢ヲ見サルモノナリ眞ニ然リ吾人ハ唯清國ノ鎮靜ヲ希望スルノ切ナルノミ去レハ計畫手段皆此一點ニ向テ始メテ良計畫良手段タルヘキナリ若夫北京ニ擄虜タル我露國人ヲ救助シ得ルノ望アラハ兵ヲ北京ニ進ムルモ固ヨリ必要ニシテ或ハ之カ爲メ北京政府モ奮勵一番匪徒ノ蔓延ヲ防キ現時ノ紛擾ヲ鎮定シ得ルニ至ラシ乎然レトモ時局一變北京政府カ此擄虜タル臣民ヲ我ニ還スニ於テハ吾人ハ絶東ニ於ケル吾人從來ノ平和主義ニ足ヲ止ムルヲ好ムモノナリ堂々地ヲ卷テ北京城ニ入り清都百萬ノ民ヲ威嚇スルモ我露國ニ取リテハ何等

外務省

ノ功能アラサルノミカ唯我ニ鄰接スル大邦四億萬ノ民ニ怨ヲ買フニ過キサルヘシ斯カル裝觀の一時ノ勝利ハ平常姑息手段ヲ以テ清國ニ威嚴ヲ保タントスル二三歐洲諸國ノ爲メニハ或ハ必要ナランナレトモ抑モ我露國ハ清國ノ中心ニ近ク兵力ヲ有スルノミナラス又長遠ナル境ヲ接シテ相互國民ノ生計上離ルヘカラサル關係アルヲ以テ我ノ清ニ對シテ威嚴ヲ有スル所以ハ全ク彼等ト異ナル所アリ英國公使ノ北京ニ駐劄スルハ獨リ英國ノ爲メナレトモ我露國公使ヲ北京ニ有スルハ北京政府ノ爲メ必要ナル次第ニシテ幾萬ノ清國民ハ我ノ版圖内ニ住シ幾百萬ノ清國民ハ我ニ關スル事業ニ依リテ其生計ヲ繫クニアラスヤ悉比利亞鐵道完成ノ曉ニ至ラハ露清ノ關係ハ益堅密ニ至ルヘシ斯カル有様ニシテ亞細亞ニ於ケル我露國ノ位地ハ全ク特殊ノモノナレハ今回ノ歐清事件ニ付テモ我ノ位地ハ彼ノ公債周旋者ノ類ニアラスシテ實ニ和解者ノ位地ニ在リト云フヘシ去レハ事情必要ナル場合ニ於テハ進ンテ其勢ヲ執ルモノ可ナラン千八百六十年英佛同盟軍カ北京ニ入ラントスルヤ當時ノ我公使「イグナナーエフ」氏此時ハ未タ伯ニアラス同盟軍ヲ説テ遂ニ兵火ノ禍ヨリ北京ヲ救ヒ「ロールド」エリジン「チン」テ清朝ノ宮殿ヲ蹂躪セサシメタリ
我ノ清國ニ於ケルハ以上ノ關係ナルヲ以テ實ニ我ニ必要ナルモノハ清國

愈満州鐵道ヲ安全ニ布設セント欲セハ勿論充分ノ兵ヲ以テ沿道數箇所ノ
要地ヲ占メ土地ノ住民ヲ馴致シテ我ヲ信セシメサルヘカラスト雖モ唯目
下ノ處ハ新ニ土地ヲ我ニ合スルノ必要ナキコト是ナリ若シ此思慮ヲ有セ
スシテ漫ニ全満州ヲ平定セン杯ト思惟スルハ十年間吾人ノ勞力費用ヲ投
シタル大經營ヲシテ空シク水泡ニ歸セシムルモノナリ高加薩ノ經營ヲ回
顧スレハ思半ニ過キン吾人ハ實際高加薩ヲ平定シタリ何ソ満州ヲ平定シ
能ハサランヤ然レトモ吾人ハ吾人カ高加薩ヲ平定セシハ六十年間ノ星霜
ヲ要シタルコトヲ忘ルヘカラスト決シテ一時之ヲ平定シタル次第ニアラス
シテ六十年ノ間常ニ此思想ヲ以テ當局者カ銳意該境ヲ馴致シタル結果ニ
外ナラサルナリ云々

右及御報候敬具

電信 明治三十三年十月一日發
同日着

青木外務大臣

第一四六號

在露 小村全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ「クリミヤ」ニ向ヒ出發シ約二ヶ月間皇帝ト共ニ同地ニ滯留スヘシ
伯ノ出發ニ先タナ本官ハ清國事變ヨリ生スル各種問題ノ最終處分ニ對スル伯ノ意見ヲ問フノ機會ヲ得タルニ伯ハ私見トシテ左ノ如ク說ケリ
完全ナル平和安寧ノ克復及有罪者ノ處罰ノ如キ列國カ均等共通ノ利害關係ヲ有スル諸問題ヲ第一ニ決定スルヲ必要トス此等諸問題既ニ決定セラレタル上ハ列國ハ其協議ヲ以テ賠償問題ヲ共同若クハ單獨ニ交渉スヘキカヲ決定スルノ問題ニ入ラサルヘカラス願フニ各國カ蒙リタル損害ハ其

外務省

程度及性質ニ於テ互ニ相同シカラサルニ因リ各種ノ要求ヲ調定スルハ頗ル困難ナルヘシ

依テ本官ハ領地割讓ノ如キハ問題外ナルカ故ニ列國ハ賠償ヲ償金ニ求メサルヘカラスト雖モ清國ノ財源ハ以テ列國ノ要求ニ應スルニ足ラサル可シト述ヘタルニ伯ハ伯自身モ亦其困難ヲ了解シ居レリト語り目下同伯カ胸裏ニ懷抱スル所ノ企畫ハ賠償問題ハ之ヲ在海牙府常設仲裁裁判所ニ付シ該裁判所ニ與フルニ當ニ各國カ要求シ得ヘキ損害ノ金額ノミナラス尙必須ノ資金ヲ取得スヘキ方法(？)ヲモ決定スルノ權能ヲ以テスヘシ然ルトキハ列國ノ要求調定ニ關シ意見ノ衝突ヨリ起ルヘキ恐アル紛擾ヲ避クルコトヲ得ヘシト云フニ在リ又將來ニ對スル保證ニ關シ伯ハ左ノ如ク說ケリ
列國ハ大沽北京間交通ノ安全ヲ保證スル爲メ一時軍隊ヲ直隸省ニ駐屯セシメ其必要消滅スルヲ待テ之ヲ撤退スヘシト然レトモ伯ハ清國ノ内政ニ永久干渉ヲ及ホスカ如キ保證ハ毫モ之ヲ是認スルヲ欲セス
前記ラムスドルフ伯ノ意見ハ全ク其一箇ノ私見ナリト雖モ亦露國政府ノ政策ト一致スルモノニシテ其要點ハ曩ニ報道シタルカ如ク清國ト親密ノ關係ヲ維持スルコト并ニ清國問題ニ關シ列國永久ノ共同ヲ防遏セントスルコト是レナリ

電信 明治三十三年十月十三日發
同 四日着
青木外務大臣

第一四七號

露國ハ多分滿州ノ近接領土ヲ併有スヘシトノ件ニ付輓近外國新聞紙ニ掲載セラレタル報道ニ關シ露國政府ハ十月一日附官報ヲ以テ絶東ニ於ケル露國行動ノ目的ハ近時發表シタル公然ノ宣言ニ於テ明確ニ指示シタル所ニシテ右宣言ノ文面ニ對照セハ前記報道ノ毫モ根據ナキコト明カナリトノ旨ヲ言明セリ

在露 小村全權公使

電信 明治三十三年十月十三日發
同 十五日着
青木外務大臣

第一四八號

吉林及奉天占領ノ結果滿州鐵道ノ保護確固タルニ至リタルヲ以テ左ノ旨趣ノ詔勅發布セラレタリ
(一)直隸省ニ於ケル軍隊並ニ第三第四及第五旅團ハ戰時組織ヲ繼續スヘシ
(二)滿州ニ於ケル軍隊ノ中指揮官ニ於テ必要不可缺ト認ムルモノハ戰時ノ組織ヲ繼續スヘシ
(三)石ノ外國境外ニ出テサル軍隊ハ西比利亞ノ某大隊及ストンナエンスク並ニ「ナタ」ノ聯隊ヲ除クノ外總テ平時ノ組織ニ復スヘシ
尙又清國政府ト談判進行中若クハ清國ノ政治上平和ニ至リタルカ爲メ決行シ得ヘシト認メタルトキハ戰時組織ヲ繼續シタル軍隊モ亦悉ク動員ヲ解キ歐洲露國ヨリ極東ヘ派遣シタル軍隊ハ之ヲ召還スヘシ云々

在露 小村全權公使

電信 明治三十三年十月十七日發
同 十九日着

青木外務大臣

第一四九號

本官電信第八十八號ニ關シ「ボルタヴァ」號及「セヴァストポリル」號ハ十月十六日極東ニ向ヒ當地ヲ出發セリ

在露 小村全權公使

電信 明治三十三年十月十九日發
同 二十日着

青木外務大臣

第一五〇號

在露 小村全權公使

露國ハ滿州ニ於テ蒙リタル損害ニ關スル限リニ於テ鐵道敷設及黑龍江航海ヲ保護スルノ必要ヲ辭柄トシテ特殊ノ利益ヲ獲得スル目的ヲ以テ單獨ニ清國ト談判セシト欲スルノ兆候アリ因テ北京ニ於テ開カルヘキ媾和談判ニ於テ帝國政府ハ損害ノ單獨若クハ聯合ノ行爲ヨリ生シタルト又其性質及地方ノ如何トヲ問ハス列國一切ノ要求ハ之ヲ綜合シテ調定セシコトヲ主張シ以テ前顯ノ如キ露國ノ舉措ヲ防遏スルコトニ盡力セラルコト得策ナリト思考ス

書信明治三十三年九月三十日附
十二月十六日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

機密第三二號

露國送兵報告第二

露國送兵報告第一ニ引續キ「オデッサ」ヨリ絶東ニ向テ發送シタル兵數及船名ハ
左ノ通ニ有之候

一八月八日出發 義勇艦隊汽船「モスクワ」號
第四狙撃旅團第十五聯隊ノ内一大隊
同旅團本部
莫斯科工兵ノ内一中隊

外務省

右ノ内士官三八名卒一、一七名 計 一、二五五名

一八月十四日出發 露國貿易汽船會社汽船「ナハナヨフ」號

第五狙撃旅團第十八聯隊ノ内四箇中隊 八〇〇名

赤十字社看護婦

三〇名

一八月十五日出發 奥國「ロイド」汽船會社汽船「ノルド、アメリカ」號

一二五〇名

一八月十六日出發 義勇艦隊汽船「ヘルソン」號

一六〇〇名

一八月二十一日出發 東亞汽船會社汽船「コレヤ」號

第五狙撃旅團第十九聯隊ノ全部

同 第十八聯隊ノ一部

同 第十七聯隊ノ一部

同 野戰病院隊ノ一部

同 輜重隊

合計 二、四〇〇名

一八月二十五日出發 伊國汽船會社汽船「ナタジミラト」ノ號
第五狙撃旅團第十八聯隊ノ内四箇中隊

第十七聯隊ノ内二箇中隊

合計 一二〇〇名

一八月二十八日出發 塙國汽船「マリヤテレザ」號

第五狙撃旅團第五砲兵大隊

同 第五飛動砲廠

合計 六七八名

一九月四日出發 塙國汽船「エレクトル」號

野戰病院隊但シ六箇病院ニシテ第一七五號第一七六號第一一〇號第一一號第一一二號第一一三號ト又各號ノ組織ハ院長一名主任醫一名補助醫二名助手九名看護婦七名藥局取締一名監視一名監視補助役一名僧一名書記二名卒七十一名ナリ

右ノ内士官三五名卒五二〇名 計 五五五名

一九月七日出發 英國汽船「グレン・シール」號

第五狙撃旅團第二十聯隊ノ一部

野戰病院隊但シ六箇病院ニシテ其組織ハ九月四日出發ノ分ニ同シ

士官及卒 合計 一四一八名

一九月八日出發 露國貿易汽船會社汽船「ツァリーツァ」號

外務省

本船ハ専ラ病人及負傷者ヲ運搬ノ用ニ供スルモノニシテ臥床百八十、毛布四百枚、寢臺布千五百三十五枚ヲ備ヘ其他藥材等一切ノ裝置全ク病院同様ニシテ主任醫師、補助醫、助手ヲ合セ其數十名外ニ僧一名看護婦三十名ヲ載セタリ

一九月九日出發 英國汽船「ナルング」號

旅順要塞歩兵聯隊ノ内一大隊

一同日出發 獨逸汽船「ビザ」號

第五狙撃旅團第二十聯隊ノ殘部悉皆

一九月十日出發 東亞汽船株式會社汽船「ハルビン」號

滿州鐵道掩護隊

士官及卒 計 一、〇二〇名

前顯運送船ノ内其長幅噸數及速力等送兵報告第一ニ未詳ナリシ分ニシテ今般知得タルモノハ左ノ通ニ有之候

一東亞汽船會社汽船「コレヤ」號

千八百九十九年進水、長四二八、フート、幅四九、三、フート、登簿噸數七、五〇〇

噸速力一四哩、滿載吃水二五、フート、汽鐘三重、膨脹三、〇〇〇馬力

一塙國「ロイド」汽船會社汽船「ノルド、アメリカ」號

千八百八十二年進水、長四一八、フート、幅五〇、フート、登簿噸數四、八二六噸

速力一哩上甲板ヨリ船底迄ノ深サ三〇フット

是迄「オデッサ」拔錨ノ各船ニハ其乗込軍隊ニ要スル武器彈藥等ノ軍需品ハ勿論乾麴、麥粉、罐詰等戰地ノ糧用ニ供スルモノモ可成的多額其船ニ積込ミ去八月八日旅順ニ向テ解纜シタル「モスクワ」號ノ如キハ武器中ニモ要塞砲十六門野戰砲二十四門ヲ積込タル外鐵道布設用鐵材ノ多量ヲ積載シ又第四及第五狙擊旅團中ノ狙擊砲兵大隊ニ屬スル馬匹ハ熱帶地方長途ノ航海ニ不便ナルカ爲メ悉ク陸路西比利亞鐵道ニ依リ東亞ニ向テ致輸送候

今回露國カ絶東ヘ輸送スルコトニ決シタル各旅團ハ曩ニ露國送兵報告第一中ニ列記シタル如クナリシカ去八月二十二日第二百二十三號電信ヲ以テ及御報告候通「ワルソー」軍管ノ第一第二狙擊旅團ハ輸送所止メノコトニ變更シ右ノ内第二旅團ハ既ニ「オデッサ」迄出發シ居タルモ去八月十七日ノ夜即チ歸營ノ命ヲ受ケタル當日ヨリ同二十一日迄ニ悉皆「ワルソー」ヘ引揚候

露國政府カ右送兵ヲ停止シタルハ勿論滿州ニ於ケル匪徒ノ形勢漸ク鎮靜シ得ルノ見込立テタルコト其重ナル原因ナルヘシト雖モ亦送兵ノ困難ハ大ニ與テ力アルヘキコト、存候今回送兵ノ事タル最初滿州ノ匪徒猖獗ヲ極メ滿州鐵道ノ中央停車場タルヘキ「ハルビン」地方ニ於テ露國官吏ヲ襲撃シ熾ニ鐵道ノ破壊ヲ始メタル當時當國大藏大臣ハ其管轄ニ屬スル滿州鐵道掩護ノ爲

外務省

メ相當ノ出兵ヲ請求シタルニ在旅順ノ兵ハ過半直隸地方ニ差向ケテ尙足ラサルヲ以テ更ニ南島蘇利境軍隊ノ幾分ヲモ派遣スルノ已ムヲ得サル時ニシテ一方ニハ彼ノ「ブラゴウ」エンスク其他黑龍江附近ノ急ニ應セサルヘカラス而シテ直隸地方ノ形勢未タ定マラサル時ナレハ當國政府カ東亞ニ於ケル露國陸軍勢力ノ不足ヲ感スルト同時ニ當國陸軍大臣ハ豫テ計畫シ居タル旅順及浦潮地方ノ増兵ヲ此際決行セント欲シ大藏大臣ノ提議アルヲ幸ヒ充分ノ送兵ヲ目論ミタルニ此事タル固ヨリ非常ノ費用ヲ要スルコトナレハ遂ニ大藏大臣トノ衝突ヲ來シタル始末ニシテ「オデッサ」ヨリ送兵セントスルニ實際運送船ニ差支ヘ義勇艦隊ノ汽船計ニテハ到底不足ナルヨリ各私立會社ノ汽船ヲモ徵發シタルトモ送兵ノ用ニ適スルモノハ殆ント少ク又採用シタルモノモ多クハ其内部構造ノ變更ヲ要シタル次第ニテ遂ニ外國船ヲモ傭入レサレハ尙足ラサルコト、ナリタルニ其費用ハ倍蓰スルノミナラス殊ニ適當ノ船舶ヲ傭入ル、コト大ニ困却ノ有様ニシテ去七月二十七日ヨリ九月十日ニ至ル四十五日ノ間ニ漸ク内外ノ船舶十七隻ヲ傭ヒ旅團二箇、要塞歩兵一大隊同砲兵二箇中隊、工兵一箇中隊及鐵道掩護隊千〇二十人ヲ發送シタルカ尙發送豫定ノ分二箇ノ旅團アレトモ此上右旅團ヲ悉皆輸送シ得ヘキ運送船傭入ハ實際困難ナルヲ以テ露國政府モ己ムヲ得ス終ニ去八月十七日ニ至リ

該旅團輸送ノ爲メ準備際中ノ二三船舶ヲモ其仕度ヲ停止シ「ワルソウ」軍管ノ旅團ニハ歸營ヲ命シタル次第ニ有之候ヘハ交代期節ニ於テ新兵發送ハ之ヲ別トシテ此上臨時絶東ニ向テ増發スルコトハ決シテ無之候
事ノ急ニ應スルカ爲メ海路絶東ニ向テ露國カ送兵シ得ルノ力ハ先ツ前顯申述候通ニ有之候得共在「キーエフ」第三旅團ノ如キ陸路鐵道ニ依リテ歐露ヨリ輸送シタルモノモ有之又各處邊境ノ軍隊ニ動員ヲ命シテ滿州ニ入レタルモノモ有之候ニ付東亞ニ於テ露國カ有スル陸軍兵數ハ目下ノ處全ク一時ノ膨脹ニシテ臨時ノ編制ニ有之候ヘハ今後其常態ニ復シタル際ニ於テ以前ニ比シ果シテ幾程ノ増加ヲ爲スヤハ其節ニ至リ更ニ取調御報可申進候敬具

書信 明治三十三年十月十四日附
十二月二十四日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

送第五四號

當國半官報ノオナエ、ウレミヤハ本月十日ノ社説ニ賠償問題ナル題目ヲ掲ケ
テ露國カ清國ニ關スル事情ハ全ク他列強ニ異リ且又今回事件ノ爲メ露國カ
被リタル損害ハ列強ノ比ニアラサルヲ以テ清國ヨリ要求スヘキ賠償ハ目下
列強ト共ニ要求スルノ必要ナク暫ク時ヲ待テ清國ニ對シ直接單獨ノ談判ヲ
爲スノ良策ナルコトヲ論シ進ンテ黑龍江附近ノ都邑ハ從來ノ儘ニテハ防禦
ニ困難ナルヲ以テ勢ヒ該地方割取ノ必要アル旨ヲ暗ニ洩ラシ居候ニ付御參
考ノ爲メ左ニ之ヲ抄譯差進候敬具

賠償問題

今回清國事件ヲシテ好都合ノ結末ヲ告ケシメント欲セハ須ラク左ノ三問題
ヲ決定スヘキナリ三問題トハ即チ處刑賠償及將來ノ保證トス清國カ國際公
法ヲ侵害シタル罪行ニ對シ列強カ先ツ清國ヲシテ満足ニ其罪ヲ償ハシメ次
ニ清國ニ向テ軍隊派遣ノ爲メ列強カ消費シタル費用及外國臣民カ清國ニ於
テ被リタル損害ヲ賠償セシメ最後ニ將來斯カル擾亂ノ再發セサルカ爲メ充
分ノ保證ヲ得タル時ニ於テ始メテ絶東ニ於ケル平和確立ニ對スル一切ノ障

外務省

害ハ排除セラルヘキナリ然ルニ此等處刑賠償及將來ノ保證ハ果シテ如何ナ
ル處刑如何ナル賠償及如何ナル將來ノ保證ヲ以テ充分ナリトスルカ列強相
互ノ間ニ於テ右ニ關スル意思未タ投合スルコト能ハサルハ實ニ遺憾ノ至ト
謂フヘシ

處刑問題ニ付テハ初メ日耳曼ハ團匪ノ巨魁引渡ヲ要求シタレトモ其後強テ
之ヲ要求スルコトヲ止メタリ又佛蘭西ハ團匪ノ巨魁ヲシテ在北京ノ列強代
表者カ指定スル罪科ニ服セシメンコトヲ希望セリ然レトモ此等要求書ノ脱
稿セラレ研究セラル、間ニ於テ清國皇帝ハ自ラ進ンテ列強ノ希望ヲ迎ヘ五
親王ニ課スルニ一層苛酷ノ刑罰ヲ以テセリ殊ニ此五親王中端郡王ノ如キハ其
職權ヲ褫奪セラレ又一切ノ支給ヲ停止セラレ剩ヘ罪科ニ照ラスカ爲メ清國
宮内省ヘ交付セラレタリ今回清國皇帝カ發布セラレタル右處刑ニ關スル詔
勅ノ寫在北京外交官ノ手裡ニ在ルヨリ察スレハ今日ハ既ニ其發布ノ有無ニ
付キ疑ヲ挿ムヘキニアラス

吾人ノ所見ヲ以テスレハ右清國皇帝ノ詔勅發布後ハ處刑ニ關スル問題ハ少
クモ其大體ヲ決了シタルモノト算シ得ヘシ抑モ列強カ團匪ノ巨魁等ヲ處刑
セント欲スルハ勿論侮辱セラレタル自重心ニ對シ啻ニ満足ヲ求ムルノ必要
アルノミナラス其處刑タルヤ清國々民ニ對シテ例ヲ示ス目的タルヘキナリ

リ此點ヨリ觀ルトキハ清國皇帝カ其臣民ニ對シテ施行セラレタル刑罰ハ外國官吏カ清國民ニ對シテ之ヲ施行スルヨリ一層ノ價值アリトス如何トナレハ第一清國民舉テ團匪ノ巨魁ハ實際罪科ヲ犯シタルコトヲ理會シ第二處刑セラレタルモノヲ以テ不幸悲慘ノ境遇ニ陷リタル外國ノ代ハリナリトシテ清國民之ヲ諒スルコト是ナリ勿論清國皇帝ノ詔勅ハ只一片ノ空文タルニ止マラスシテ實際履行セラレサルヘカラスト雖モ右ニ關シ一時ニ充分ノ證據ヲ望ムカ如キハ到底困難ナルコトナリ兎ニ角未タ證據ヲ見サルト云フヲ以テ詔勅ノ不履行ナリト斷定スルコトヲ得ス

次ニ賠償問題ナルカ此問題ニ付キ列強カ一般ニ同意スルコト亦容易ニアラス其重ナル困難ハ清帝國ノ國帑甚タ少額ナルコトニシテ清帝國ニ於ケル信スヘキ收入ハ唯一ノ關稅アルノミナレトモ其關稅タルヤ大半國債ノ利息トシテ支出セラレ殘ルトコロハ實ニ僅少ノ額ナリ而シテ又今回事件ノ爲メ清國經濟社會ノ動搖ハ清國本年ノ歲入ニ影響スルノミナラス今後數年ノ收入ヲシテ大ニ減少セシムヘキヲ以テ清國ノ財政ハ尙一層ノ困難ヲ呈スヘケレハ列強タルモノ宜シク此邊ヲモ察セサルヘカラスト然ルニ賠償トシテ清帝國ノ土地ヲ割取スルコトハ勿論相成ラサル事ナリ清國事件ノ當初ヨリ列強カ互ニ固守スヘキ綱領ノ一トシテ凡ソ清帝國ノ分割ヲ惹起スカ如キ行爲ハ之

外務省

ヲ排斥スヘキ筈ナレハ更ニ爰ニ贅スルノ必要無シ

吾人カ既ニ毎度唱道シタルカ如ク今回清國事件ニ關シテハ我露國ノ境遇ハ遙ニ列強ト同シカラサルナリ實ニ然リ清帝國ノ紛擾ハ唯吾人ニ對シテノミ影響ヲ與ヘタリ露國版圖ノミニ於テ獐犢ナル襲撃ヲ受ケタリ而シテ土壤接近スルカ爲メ相互ノ利益上相離ルヘカラサル關係ヲ有スル吾人ハ隣邦ノ擾亂ヲ感スルコト他ノ列強ノ比ニアラス看ヨ幾百萬ノ露國々帑ヲ投シテ經營シタル滿州鐵道ノ莫大ナル事業ハ遂ニ清國暴動ノ爲メ非常ノ損害ヲ被ムリタリ

却說賠償問題ニ於テハ彼ノ合資會社銀行其他之ニ類スル私人ニ對スル賠償ト列強カ軍事ノ爲メニ消費シタル費用償還トハ其區別ヲ明瞭ニセサルヘカラスト而シテ前者ハ無論何等適當ノ方法ヲ以テ辦償セラレサルヘカラスト雖モ後者即チ列強カ消費シタル費用ノ償還ハ今日尙一考ヲ要スヘシ他列強ハ知ラス吾人ハ清國ニ對シ格別ノ關係ヲ有スルヲ以テ此問題ニ付亦格別ノ覺悟ヲ爲スノ已ムヲ得サルナリ百考スルニ我露國カ消費シタル費用償還ハ目下之ヲ要求セサルヲ以テ最良ノ策トスヨシ列強カ賠償ヲ得ルモ其之ヲ得ルニ放任セン吾人ハ暫ラク之ヲ待ツニ如カス我若シ暫ラク待ツトスレハ夫或ハ列強カ要求スルニ際シ清帝國ナシテ其負擔ノ幾分ヲ輕カラシムルコト、ナ

リ隨テ吾人カ久シク希望スル平和ノ確立ヲシテ速カナラシムルヲ得ンカ我
今賠償ヲ要求セサルハトテ清國ハ我ト幾千露里ノ境ヲ接スル隣邦ナレハ我
ヲ措テ顧ミサルヲ得サルヘク殊ニ我カ勢威ノ及ホシタル感覺ハ清國民ノ腦
裡ニ埋滅セサルヘシ斯カル特別ノ境遇アルヲ以テ吾人ハ他列強ニ比シ容
易ニ清國ニ對シテ單獨ノ行爲ヲ爲シ得ルモノナレハ須ラク充分此境遇ヲ利
用スヘキナリ吾人ニ於テハ賠償ヲ取急クヘキ必要ナシ他列強カ各其損害ヲ
枚舉スルハ其任意ニシテ吾人ノ聞知スヘキニアラス元來彼等ノ損害ハ總テ
眼前ニ在ルヲ以テ之ヲ算定スルコト甚タ難事ニアラサレトモ我ノ損害ハ然
ラス其之ヲ受クルコト列強ニ比シテ一層著シク被害萬端ニ亘リテ容易ニ算
定シ難キヲ以テ若シ之ヲ算定セントスルニハ充分ノ時日ヲ要シ假令算定シ
得テ相當ノ賠償ヲ要求スルトスルモ實際國帑ニ乏シキ清國ヨリ之ヲ得ル迄
ハ又充分ノ時日ヲ要スルナリ吾人ハ固ヨリ清帝國ノ土地ヲ我ニ合併スルヲ
欲セス然リ然レトモ黑龍江沿道ニ於ケル我都邑ハ彼岸ヨリノ襲撃ヲ防禦ス
ルコト甚タ困難ナルヲ以テ從來ノ儘ニテハ吾人ハ最早之ヲ保ツ能ハサルナ
リサテ此等都邑ヲ安全ニ庇護セント欲セハ勢ヒ實際上適當ナル約諾ヲ得ル
ノ必要アルコト分明ナリトス

外務省

取り急クノ必要更ニ無シ吾人ノ所見ヲ以テスレハ賠償要求ハ目下列強ト之
ヲ共ニセス我ハ我ノ損害ヲ算定シテ清國ト共ニ徐カニ而カモ慎重確實ヲ以
テ隣邦的ニ談判ヲ爲サハ事却テ簡易ニシテ其進行亦速カナルヘシ全体清國
ト事ヲ處理センニハ最も慎重確實ナルヲ要ス急速事ヲ成サント欲スレハ到
底慎重確實ナル能ハサルナリ

書信 明治三十三年九月四日附
十月二十五日着

加藤外務大臣

在露 小村全權公使

送第五〇號

清國事件ニ關スル露國ノ方針トシテ各國政府ヘ傳達セシメンカ爲メ去ル八月廿五日露國外務大臣ヨリ各國駐劄ノ露國代表者ニ發シタル電訓ノ全文ヲ舉ケ右電訓ヲ發スルノ理由ヲ述ヘテ本月一日ノ官報ニ掲載候事ハ當日第百三十三號電信ヲ以テ及御報置候通ニ付既ニ在本邦露國公使ヨリ御領悉相成候義ト存候得共尙御參考ノ爲メ左ニ譯述差進候

直隸戰地ニ於ケル事務局ハ近來意外ニ迅速ノ進行ヲ爲セリ即チ外國公使館及外國臣民ヲ重圍ノ裡ヨリ救拯スルノ目的ヲ有シタル而カモ比較的多カラサル聯合軍隊ハ啻ニ此重要ナル最初ノ目的ヲ達シタルノミナラス之ト同時ニ清帝國首府ニ蒐マリ居タル匪徒擊退シ又北京ト交通ノ路ヲ安全ナラシムルノ處置ヲ執レリ此等ノ好境遇ハ豫メ定メタル我露國ノ政綱ニ寸毫違フ所ナシ此政綱ノ本領ハ前數回發表シタル政府宣言書ニ記載シタル右數回ノ宣言書中ニ言ヘルガ如ク露西亞ハ清國ニ向テ開戰ヲ布告セザリキ露西亞軍隊ハ定限アル目的ヲ以テ隣國ノ地ニ入りタリ而シテ其目的ノ重ナルモノハ今ヤ之ヲ貫徹セリ去レハ露國今後ノ意向ニ關シ何等誤解虛

外務省

說等ヲ惹起サ、ラシムルカ爲メ皇帝陛下ハ外務大臣ニ命シテ各國駐劄ノ露國代表者ニ宛左ノ如キ電訓ヲ發セシメラレタリ

千九百年八月廿五日露國外務大臣ヨリ各國駐劄ノ露國代表者ニ發シタル電訓

清國ニ於ケル紛擾湧發ノ當時ヨリ帝國政府カ力ヲ盡シタル最近ノ目的ハ左ノ如クナリキ第一北京ニ於ケル露國代表者ヲ保護シ并ニ清國匪徒ノ罪行ヨリ露國臣民ノ安全ヲ保スルコト第二速ニ清帝國內ニ法律の秩序ヲ立ツルカ爲メ紛擾鎮定ニ要スル助力ヲ北京政府ニ與フルコト是ナリ其後利害關係ヲ有スル列國カ前顯同様ノ目的ヲ以テ清國ニ軍隊ヲ派遣スルコトニ決シタル際帝國政府ハ清國事件ニ關シテハ以下ノ綱領ニ基キテ動作センコトヲ提議シタリ即チ第一、列國全體ノ共同一致ハ固ク之ヲ維持スルコト第二、支那古來ノ政府組織ハ之ヲ保存スルコト第三、清帝國ノ分割ヲ來タスカ如キ所爲ハ一切之ヲ排除スルコト第四、協力シテ清帝國內ニ安寧秩序ヲ保持シ得ヘキ法律上ノ中央政府ヲ北京ニ建設スルコト是ナリ以上ノ各項ニ付テハ殆ント總テノ列國間ニ同意成立シタリ何等此外ノ目的ニ驅ラレス帝國政府ハ固ク以上述ヘタル綱領ヲ守リタリ又尙之ヲ守ラント欲スルモノナリ

若シ夫レ牛莊ニ於ケル我軍隊ニ對スル匪徒ノ襲撃并ニ我國境ニ於ケル支那人ノ一度ナラヌ仇視ノ行爲等例ヘハ何等由來スヘキ原因ナキ「ブラゴウ」エシナエンスク砲撃ノ如キ事局ノ進行上露國ヲ激昂セシメテ遂ニ牛莊ノ占領ト爲リ又滿州域内ニ露兵ノ派遣トナリタルカ如キニ至テハ我ハ即チ清國匪徒ノ攻撃ヲ反撃センカ爲メ特別ノ必要ヨリ一時ノ手段ヲ執リタルモノナレハ之ヲ以テ全ク帝國政府ノ政略ト異ナレル所ノ何等利己的ノ籌策ナリト證斷スルヲ得ス

滿州ニ於テ速ニ堅固ナル秩序ノ確立セラレ又東清鐵道會社ニ與ヘラレタル特權ニ關シ清國ト特別ノ約束ヲ以テ布設ヲ保證シアル鐵道ノ保護ニ付總テ必要ノ手段ヲ執ラレ得ルニ於テハ他邦ノ動作障害トナラサル限り我露國ハ隣帝國ノ版圖内ヨリ軍隊ヲ引揚クルコトヲ猶豫セサルヘシ外國又ハ各國會社ノ有スル利益例ヘハ露國カ占領シタル開港場牛莊并ニ露國軍隊ヲ以テ修設シタル鐵道線路ニ於ケル利益ハ決シテ侵サル、コトナク充分之ヲ確保セラルヘシ

豫期シタルヨリ一層速ニ境遇ヲ變更セシ今回ノ北京占領ヲ以テ帝國政府ノ重ナル第一目的ハ貫徹セラレタリ即チ各國ノ代表者ハ同シク重圍ノ中ニ在リシ外國臣民ト共ニ救助セラレタレハナリ第二ノ目的即チ秩序及各

外務省

國ニ對スル當然ノ關係ヲ確立セシムルカ爲メ法律上ノ中央政府ニ助力ヲ與フルコトハ清皇帝ヲ始メトシ攝政太后及總理衙門ノ首府ヲ去リタルニ依リ時節到來スルニ至ル迄困難タルコトヲ免カレス以上ノ次第ナルヲ以テ帝國政府ハ各國使臣カ其任國ノ政府ナキ北京ニ尙續テ駐留スルノ理由アルヲ認メス

去レハ帝國政府ハ其公使ナル四等官「ギールス」ヲ一切館員ト共ニ天津ニ召喚セント欲ス又露國軍隊ハ指定ノ地ニ向テ公使館員ト同行スベシ抑モ我露國カ初メ定メタル目的ノ範圍ヲ逸セスシテ執リ來リタル而カモ一度ナラス宣言シタル確固不拔ノ決心ヨリスレハ露國軍隊ノ今後北京ニ屯在スルコトハ全ク目的ナキモノタリ

然リト雖モ法律上ノ清國政府カ新ニ政權ヲ握リテ列國ト談判ヲ爲スカ爲メ全權ヲ委ネタル代表者ヲ任命スルヤ否ヤ我露國ハ列國政府トノ同意ニ由リ談判ヲ爲スノ目的ヲ以テ全權委員等ヲ任命スルコトヲ躊躇セサルヘク而シテ彼等ヲ談判ノ爲メニ撰定セラレタル場所ニ向ケテ差立ツヘシ以上ノ諸件ヲ貴殿ノ任國政府ニ傳達スルコトヲ貴殿ニ訓令スルト同時ニ右政府カ我所見ヲ充分理會是認センコトヲ希望ス
尙右訓令ノ後ニ左ノ一項ヲ添載有之候

以上記述シタル外國政府ヘノ通牒ニ引續キ直ニ四等官「ギールス」及陸軍中
將「レニユーウ井ナ」ニ向テ總テ我帝國公使館員帝國臣民及帝國派遣軍隊ノ
北京ヨリ天津ニ移動スルコトニ關シ遲滞ナク陛下ノ御趣意ヲ存立スルコ
トニ務ムヘキ旨命令シタリ右移動ニ關シテハ勿論彼等ハ土地ノ狀況ヲ斟
酌スヘキナリ

右御報申進候敬具

ト
務
事

書信 明治三十三年八月十四日附
九月二十六日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

送第四三號

本月二日ノ半官報ノオチエウレミヤニ於テ今回ノ支那事件ニ付露國ノ清國ニ於ケル關係ヲ説キ充分ノ兵ヲ滿州ニ入レテ徐ニ滿州鐵道ノ完成ヲ謀ルヘキ趣意ノ論說ヲ掲載候ニ付御參考ノ爲メ左ニ之ヲ抄譯差進候
今回ノ清國事件ニ於テ我ニ最モ必要ナルモノハ鎮靜ナリ我露國ニ於テハ暴動ノ鎮靜以外ニ何等收利ノ欲望アラズ我露國カ目下絶東ニ有スルモノハ無論莫大ノ價ヲ拂フテ之ヲ得タルモノナルモ今日又斯カル價ヲ投シテ絶東ニ得ル所アル乎吾人ハ之ニ對スル好形勢ヲ見サルモノナリ眞ニ然リ吾人ハ唯清國ノ鎮靜ヲ希望スルノ切ナルノミ去レハ計畫手段皆此一點ニ向テ始メテ良計畫良手段タルヘキナリ若夫レ北京ニ擒虜タル我露國人ヲ救助シ得ルノ望アラハ兵ヲ北京ニ進ムルモ固ヨリ必要ニシテ或ハ之カ爲メ北京政府モ奮勵一番匪徒ノ蔓延ヲ防キ現時ノ紛擾ヲ鎮定シ得ルニ至ラシ乎然レトモ時局一變北京政府カ此擒虜タル臣民ヲ我ニ還スニ於テハ吾人ハ絶東ニ於ケル吾人從來ノ平和主義ニ足ヲ止ムルヲ好ムモノナリ堂々地ヲ卷テ北京城ニ入り清都百萬ノ民ヲ威嚇スルモ我露國ニ取リテハ何等

外務省

ノ功能アラサルノミカ唯我ニ鄰接スル大邦四億萬ノ民ニ怨ヲ買フニ過キサルヘシ斯カル裝觀的一時ノ勝利ハ平常姑息手段ヲ以テ清國ニ威嚴ヲ保タントスル二三歐洲諸國ノ爲メニハ或ハ必要ナランナレトモ抑モ我露國ハ清國ノ中心ニ近ク兵力ヲ有スルノミナラス又長遠ナル境ヲ接シテ相互國民ノ生計上離ルヘカラサル關係アルヲ以テ我ノ清ニ對シテ威嚴ヲ有スル所以ハ全ク彼等ト異ナル所アリ英國公使ノ北京ニ駐劄スルハ獨リ英國ノ爲メナレトモ我露國公使ヲ北京ニ有スルハ北京政府ノ爲メ必要ナル次第ニシテ幾萬ノ清國民ハ我ノ版圖内ニ住シ幾百萬ノ清國民ハ我ニ關スル事業ニ依リテ其生計ヲ繫クニアラズヤ悉比利亞鐵道完成ノ曉ニ至ラハ露清ノ關係ハ益堅密ニ至ルベシ斯カル有様ニシテ亞細亞ニ於ケル我露國ノ位地ハ全ク特殊ノモノナレハ今回ノ歐清事件ニ付テモ我ノ位地ハ彼ノ公債周旋者ノ類ニアラスシテ實ニ和解者ノ位地ニ在リト云フヘシ去レハ事情必要ナル場合ニ於テハ進ンテ其勢ヲ執ルモ可ナラン千八百六十年英佛同盟軍カ北京ニ入ラントスルヤ當時ノ我公使イグナナ―エフ氏此時ハ未ダ伯ニアラス同盟軍ヲ説テ遂ニ兵火ノ禍ヨリ北京ヲ救ヒ「ロールド」エリシ「ナシ」テ清朝ノ宮殿ヲ蹂躪セサランメタリ
我ノ清國ニ於ケルハ以上ノ關係ナルヲ以テ實ニ我ニ必要ナルモノハ清國

ノ鎮靜ナリ就中清國北半ノ鎮靜ナリ此鎮靜ニシテ之ヲ得ヘクンハ他ニ希望ナ有セス然ルニ倍テ今日ノ形勢ヨリ察スルニ露清ノ國境タル黑龍江モ其左岸ニ住スル我露國民ノ爲メニ充分安心シ得ヘキ國境ニアラス兩岸ノ國民教育ノ程度ナ一ニシテ始メテ黑龍江モ露清兩國ノ國境トスヘキナレトモ目下ノ處此等均一ノ程度アルヲ見ス去リトテ此儘ニ打措カハ我都邑ノ近傍ニ於テ將來再ヒ匪徒ノ蜂起シテ無辜ノ良民ヲ砲撃スルコトアラシ然ラハ則テ將來テ慮リ滿州ヲ割取スルノ必要アル乎

滿州ノ鎮定ハ如何ナル手段ヲ執ルモ容易ニ之ヲ達シ難カルヘシ勿論五萬ノ兵ヲ率ヒテ滿州ニ入ラハ一時清國ノ諸兵ヲ驅除スル或ハ難事ニアラサルヘケレトモ是レ全ク一時ノ快ヲ貪ルニ過キスシテ只清兵ヲ馬賊ノ類ニ化セシメ永ク禍根ヲ扶殖スルニ異ナラス去レハ全滿州ヲ歎トシテ兵火ノ間ニ事ヲ成サントスルカ如キハ決シテ當ヲ得タルノ策ニアラス然リ一時ニ滿州ヲ鎮定セントスルカ如キハ遠ク諸機關ヲ歐洲ニ控ヘナカラ新難事ヲ絶東ニ惹起スモノト云フヘシ然ラハ則テ之ヲ如何セン乎

住民千五百萬ヲ有スル廣大ナル滿州ノ平定ハ先ツ之ヲ措テ差當リ吾人ハ實際上必要ナル吾人ノ經營ヲ貫徹スヘキナリ實際上必要ナル吾人ノ經營トハ他ナシ滿州鐵道ヲ完成スルニ在リ

外務省

愈滿州鐵道ヲ安全ニ布設セント欲セハ勿論充分ノ兵ヲ以テ沿道數箇所ノ要地ヲ占メ土地ノ住民ヲ馴致シテ我ヲ信セシメサルヘカラスト雖モ唯目下ノ處ハ新ニ土地ヲ我ニ合スルノ必要ナキコト是ナリ若シ此思慮ヲ有セスシテ漫ニ全滿州ヲ平定セン杯ト思惟スルハ十年間吾人ノ勞力費用ヲ投シタル大經營ヲシテ空シク水泡ニ歸セシムルモノナリ高加薩ノ經營ヲ回顧スレハ思半ニ過キン吾人ハ實際高加薩ヲ平定シタリ何ソ滿州ヲ平定シ能ハサランヤ然レトモ吾人ハ吾人カ高加薩ヲ平定セシハ六十年間ノ星霜ヲ要シタルコトヲ忘ルヘカラス決シテ一時之ヲ平定シタル次第ニアラスシテ六十年ノ間常ニ此思想ヲ以テ當局者カ銳意該境ヲ馴致シタル結果ニ外ナラサルナリ云々

右及御報候敬具

書信 明治三十三年十月十九日附
十二月三日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

機密第三三號

清國事件ニ關スル露國ノ態度

清國事件ニ關スル露國ノ態度ニ就キ本使ハ可成精細ニ探知セシコトヲ務メ
タリシカ何分着任日淺クシテ充分ニ報道ヲ得ルノ方便モ未タ備ハラス満足
ニ知悉スルコト難カリシモ尙ホ力ノ及フ限り探究ヲ遂ケテ大体ノ見當ヲ附
ケ新事件ノ發生スル毎ニ露國ノ執レル處置ハ其都度電報又ハ書信ヲ以テ具
報シ來レリ爰ニ本事件ニ關スル露國ノ態度ニ就キ當初ヨリ觀察シ來リタル
所ヲ梗概シテ左ニ縷述シ御參考ニ供セントス

第一 清國事件ニ關シ露國政府ノ執リタル處置

露國現時ノ對清政策ハ一方ニ於テ其經營ノ主力ヲ滿州ニ用井即チ遼東ノ兵備
及東清鐵道ノ布設ヲ急キ可成速ニ完成セシメンコトヲ務メ他ノ一方ニ於テ清國
政府ニ恩威ヲ加ヘ之レト友誼的關係ヲ厚クシテ永ク優等ノ勢力ヲ北京朝廷
ノ上ニ維持セントスルニアリ故ニ滿州ノ經營未タ半途ニ在ル今日ニ於テ清
國ノ平和力攪亂セラル、コトハ甚タ好マサル所ニシテ本年ノ春頃ヨリ山東
地方ニ顯ハレタル義和團騷擾ノ如キモ露國ハ當初ヨリ之ヲ重大視セス成ル

外務省

ヘクハ外ヨリ手ヲ出シ之ニ干涉スルコトヲ避ケンテ欲シタリシカ五六月ノ
交ニ至リ該騷擾ハ益勢力ヲ加ヘテ北京ニ及ヒ各國公使館ノ位置危險トナリ
各國水兵ノ入京ヲ以テ充分ニ保護ヲ全クスルコト能ハス北京天津間ノ交通
モ全ク杜絶セラル、ニ至リタレハ茲ニ進ンテ手ヲ下シ匪徒ノ鎮定ニ盡力スル
ヲ必要ト認メ直ニ附近ノ司令官ニ令テ下シ速ニ四千ノ陸兵ヲ派遣セシメタ
リ(六月十八日電報第四十八號)當時各國ニ於テ陸兵派遣ノ議アリシヲ以テ露
國ハ迅速ニ陸兵ヲ出シ該騷擾ノ一層激烈トナルニ先ナテ之ヲ平定シ以テ他ノ
列國カ多數ノ陸兵ヲ派遣スルヲ必要トスルノ時機ニ至ラシメサランコトヲ
欲シタリシナリ然ルニ義和團ノ騷擾ハ意外ニ重大トナリ之ニ對スル清國政
府ノ態度モ確乎タラス官兵亦團匪ニ加ハルモノアリ其勢猖獗ニシテ天津ノ鎮
定モ容易ニ爲シ難ク遷延時日ヲ經過シ各國ハ續々陸兵ヲ派遣スルニ至レリ
六月十七日大沽砲撃ノコトハ事局ノ重大ナルコトヲ示シタルニツキ本使ハ
之ニ關スル露國當時ノ外務大臣故ムラヴエフ伯ノ意向ヲ叩キタルニ伯ハ此
事ヲ以テ毫モ形勢ニ變化ヲ及ホスモノト認メ却テ騷擾ヲ鎮定セシムルニ
利益アルヘシト考フル旨ヲ語レリ續テ露國ハ六月二十四日ノ官報ヲ以テ其
出兵ノ目的ト大沽占領ノ理由ヲ説明セル宣言書ヲ公布セリ(六月二十日附電
報第五十一號六月二十四日附電報第五十九號及七月四日附機密第二十六號)

明治三十三年十月十九日附
十二月三日着
青木外務大臣
機密第三三號

書信 明治三十三年十月十九日附
十二月三日着

青木外務大臣

在露 小村全權公使

機密第三三號

清國事件ニ關スル露國ノ態度

清國事件ニ關スル露國ノ態度ニ就キ本使ハ可成精細ニ探知セシメタルヲ知シカ何分著任日淺クシテ充分ニ報道ヲ得ルノ方便モ未タ備ハラ
リ知悉スルコト難カリシモ尙ホ力ノ及フ限り探究ヲ遂ケテ大体ノ見當
ケ新事件ノ發生スル毎ニ露國ノ執レル處置ハ其都度電報又ハ書信ヲ以テ
報シ來レリ爰ニ本事件ニ關スル露國ノ態度ニ就キ當初ヨリ觀察シ來リタ
所ヲ梗概シテ左ニ縷述シ御參考ニ供セントス

第一 清國事件ニ關シ露國政府ノ執リタル處置

露國現時ノ對清政策ハ一方ニ於テ其經營ノ主力ヲ滿州ニ用井即チ東
及東清鐵道ノ布設ヲ急キ可成速ニ完成セシメンコトヲ務メ他ノ一
政府ニ恩威ヲ加ヘ之レト友誼的關係ヲ厚クシテ永ク優等ノ勢
ノ上ニ維持セントスルニアリ故ニ滿州ノ經營未タ半途ニ在ル
國ノ平和カ攪亂セラル、コトハ甚タ好マサル所ニシテ本年ノ
地方ニ顯ハレタル義和團騷擾ノ如キモ露國ハ當初ヨリ之ヲ重

外務

ヘクハ外ヨリ手ヲ出シ之ニ干涉スルコトヲ避ケント欲シタリ
交ニ至リ該騷擾ハ益勢力ヲ加ヘテ北京ニ及ヒ各國公使館ノ位
各國水兵ノ入京ヲ以テ充分ニ保護ヲ全クスルコト能ハス北京
モ全ク杜絶セラル、ニ至リタレハ玆ニ進ンテ手ヲ下シ匪徒ノ鎮
ヲ必要ト認メ直ニ附近ノ司令官ニ令ナシ速ニ四千ノ陸兵ヲ
リ六月十八日電報第四十八號當時各國ニ於テ陸兵派遣ノ議
國ハ迅速ニ陸兵ヲ出シ該騷擾ノ一層激烈トナルニ先ナシ之ヲ平
列國カ多數ノ陸兵ヲ派遣スルヲ必要トスルノ時機ニ至ラシメ
欲シタリシナリ然ルニ義和團ノ騷擾ハ意外ニ重大トナリ之ニ對スル清國
府ノ態度モ確乎タラス官兵亦團匪ニ加ハルモノアリ其勢猖獗ニシテ天津ノ
定モ容易ニ爲シ難ク遷延時日ヲ經過シ各國ハ續々陸兵ヲ派
六月十七日大沽砲撃ノコトハ事局ノ重大ナルコトヲ示シタ
之ニ關スル露國當時ノ外務大臣故ムラヴエフ伯ノ意向ヲ叩
事ヲ以テ毫モ形勢ニ變化ナシ及ホスモノト認メ却テ騷擾ヲ
利益アルヘント考フル旨ヲ語レリ續テ露國ハ六月二十四日
出兵ノ目的ト大沽占領ノ理由ヲ説明セル宣言書ヲ公布セリ
報第五十一號六月二十四日附電報第五十九號及七月四日附

此レニヨリ露國カ終始時局ヲ重大視スルコトヲ好マス清國ニ對シテハ依然
友誼的態度ヲ保續スルコトヲ唱ヘ結局清國ノ保全ヲ傷ケサラシメント欲セ
ル意思ヲ有セルコト明ニ認ムルコトヲ得ルナリ
而シテ各國派遣ノ陸兵ハ漸次ニ到着シテ天津ニ集合スルコト、ナリシニヨ
リ露國ハ當初ヨリノ態度ト勢ノ趣ク所已ムヲ得ス各國軍ト共同シテ行動ス
ルノ態度ヲ執リタルモ亦自ラ迅速ニ増發軍ヲ派遣シテ其勢力ヲ優等トナシ
以テ主動者ノ地位ヲ繼續セントシ且各國軍ト共同動作スルノ目的ヲ騷擾ノ
鎮定及北京在留官民ノ救援ニ制限セシコトヲ欲シ他國ヲシテ成ルヘク清國
問題ニ深入セシメサランコトヲ希望セシナリ是レ當時本使カ露國政府ニ最モ
勢力アル陸軍大臣、クロバトキン中將及大藏大臣、ワヰツテ氏等ノ談話ニヨリ
確ムルヲ得タルノミナラス外務大臣代理、ラムスドルフ伯ノ談話ノ口氣ヨリ
認知シタル所ナリ六月二十一日附電報第五十五號同二十四日附電報第五十
八號同二十五日附電報第六十一號同二十八日附電報第六十二號及同三十日
附電報第六十五號

外務省

初頃ヨリ形勢俄ニ一變シテ騷擾ノ勢激烈且迅速ニ滿州ニ入り忽ニシテ各方
面ニ波及シ或ハ「ブラゴヴ」スナンスクノ砲撃及黑龍江航行汽船ノ襲撃トナリ
或ハ「ハイラール」ニ於テ露國人ノ域外退去ヲ強要スル等騷亂ハ全滿州ニ互ル
ニ至レリ七月十七日附電報第七十八號及同二十日附電報第八十七號然ルニ同
地方附近黑龍江地方ニ現在セシ露國兵備ハ甚タ不完全ニシテ此騷擾ヲ鎮定ス
ルニ到底充分ナラサルモノト認メラレタルニ付キ露國ハ多數ノ兵ヲ歐洲露
西亞ヨリ派遣スルコトニ決シ狙撃歩兵五個旅團其他雜種兵若干ニ出發ヲ命
シ内狙撃歩兵一旅團及工兵鐵道兵ハ西北利亞鐵道ニヨリ陸路ハ「ボロフカ」ニ
向ハシメ他ハ皆「オデツサ」ヨリ海路輸送セシメントノ計畫ヲ以テ七月二十七
日以降續々汽船ヲ借上ケテ兵ヲ搭載シ絶東ニ向ハシメタリ然ルニ當時汽船
ヲ借上ルコト甚タ容易ナラス費用亦高額ニ上リ國庫ノ負擔トシテ過大ナルニ
至レルヨリ遂ニ最初豫定シタル五個旅團ノ兵ハ悉ク發送スルニ至ラス海路
二個旅團ノ輸送ヲ了ヘントスル頃ヨリ「オデツサ」ヨリノ送兵ヲ停止シ八月十
四日以降ニ於テ殘餘二個旅團ハ遂ニ之ヲ故隊ニ復歸セシメタリ七月二十四
日附電報第九十二號八月十日附電報第一百四十四號同二十日附電報第二百二
號同二十二日附電報第二百二十三號及八月十一日附機密第二十八號九月三十
日附機密第三十二號

露國カ清國事件ノ爲メ要スル經費ヲ國庫通常ノ財源内ニ於テ負擔スルコトノ困難ナリシコトハ此事件ヲ公然ノ理由トシテ關稅及内地稅ノ増率ヲ行ヒ且來年一月以降歐洲貿易ニ對スル關稅率ヲ太平洋ノ貿易ニ及ホサシメントスルニヨリテ其一斑ヲ窺フコトヲ得ヘシ(八月六日附電報第百九號同二十七日附電報第百二十六號)

八月上旬獨逸國元帥「ワルデルゼ」伯ヲ在北清聯合軍ノ總指揮官トナスコトヲ承諾シタルコトニツキテ露國政府ハ此處置ニ關スル事情ヲ説明スルタメ宣言書ヲ發シ再ヒ清國ニ對スル友情ヲ唱ヘ騷擾ノ速ニ鎮靜センコトヲ切望スルノ趣意ヲ反覆公言セリ(八月十六日附電報第百二十號八月二十二日附送第四十五號)

八月十四日聯合軍北京ニ入り各國使臣及居留民ノ救護セラレタルハ露國ノ豫期セシヨリハ甚ダ速ナリシ所ニシテ此前後露國ハ或ハ北京攻撃以前談判ヲ開キ公使以下ヲ安全ニ救出シ得ヘキ條件ヲ以テ一時清國ニ停戰ヲ許サントノ我提議ニ熱心賛成シテ自ラモ進ンテ列國ニ勸誘シ或ハ北京朝廷ノ府外播遷ヲ甚ダ氣遣ヒ居リシ等ノコトアリ(八月十二日附電報第百十一號同十五日附電報第百十八號)專ラ事務局ノ永續紛糾スルコトヲ避ケントノ意アリシモ遂ニ聯合軍ハ武力ヲ以テ帝都ニ進入シ光緒皇帝西太后共ニ西方ニ遷幸アリシ

外務省

ヨリ茲ニ復タ事件ノ落着キ遲延セシムルコト、ナリシハ露國ノ甚ダ好マサリシ所ナリ露國ハ遂ニ斷然其使臣及軍隊ヲ北京ヨリ撤退セシメントシ各國政府ニモ之ヲ慫慂シ之レト同時ニ露國カ今回ノ事件ニ就キテ是迄執リ來リタル態度及其行動ノ範圍ヲ一層明確ニシ又將來執ラントスル態度ヲ説明セル宣言書ヲ各國政府ニ提出シ且之ヲ官報ニ公布セリ(八月二十九日附電報第百二十八號八月三十日附電報第百二十九號同日附電報第百三十號九月一日附電報第百三十三號及九月四日附送第五十號)此宣言書中ニ露國ハ滿州ヲ永久占領スルノ意思ナク該地方ノ秩序回復シ駐兵ノ必要ナキ時ニ至ラハ他國ノ行動事情已ムヲ得サルニ至ラシムル場合ノ外該地方ノ軍隊ヲ撤回スヘキ旨ヲ明言シタルハ清國ノ保全ヲ傷ケントスル大勢ヲ誘致セシメサランコトヲ希望セルニヨルモノナリ此宣言書ニヨリ本使カ當初ヨリ觀察セル露國政府カ本事件ニ關シ執リタル政略ノ二大要點即チ第一ニ清國ノ保全ハ此際傷ケシムルコトヲ防キ清國政府ニ恩誼ヲ賣リテ其勢力ヲ永ク北京朝廷ノ上ニ維持セントスルコト第二ニ今回ノ騷擾ヲ成ルヘク速ニ落着セシメテ他ノ列國カ清國ニ手ヲ出スコトノ益深キニ至ルコトヲ避ケ以テ將來清國問題ニ關シ列國協同策ノ行ハレサランコトヲ務メタルコトハ明白トナリタリ爾後北京ヨリ公使及軍隊ヲ撤退セシムルコトハ形勢ノ不可ナルモノアリテ

充分ニ行ハレス又清國政府ト事後ノ談判ヲ開始セントスルニツキ種々ノ
提議現ハル、モ列國ノ意見區々一致セス在再時日ヲ經過セリ此間ニ於テモ
露國ハ成ルヘク事局ノ速ニ纏マランコトヲ務ムル方針ヲ以テ提議ニ應答シ
清國ト速ニ談判ヲ開カシメンコトヲ力メタリ(九月廿七日附電報第四百十五
號)九月三十日外務大臣代理ラムスドルフ伯皇帝陛下ノ勅召ニヨリ行在地ク
リミヤ地方ヘ赴クニ先テ本使ハ會見ノ機會ヲ得テ清國事件ヨリ發生シタル
諸問題ノ最終ノ決着如何ニ關シ伯ノ意見ヲ質シタリシカ伯ハ其一己ノ意見
ナリトシテ語リテ曰ク先ツ第一ニ必要ナルハ各國カ等シク且共同ニ利害ヲ
有スル諸問題即平和及秩序ヲ完全ニ恢復シ及罪人ヲ處罰スルコトヲ落着セシ
ムヘキコトニシテ此事落着ノ上ハ列國ハ進ンテ共同又ハ單獨ニ賠償ノ問題ヲ
協議スヘキヤ否ヤヲ決定スヘシ各國ノ被リタル損害ハ其額及性質ニ於テ異
ナルモノアレハ種々ノ要求ヲ調和スルハ著シキ困難ヲ感スルコトナルヘシ
ト依テ本使ハ此際土地讓與ノコトハ全ク問題トナスヘカラサルコトナレハ
各國ハ償金ノ形式ヲ以テ賠償ヲ求メサルヘカラス然ルニ清國ノ財政上ノ資
力ハ全ク各國ノ要求ニ應スルコト能フヘカラサルナリト述ヘタルニ伯ハ答
ヘテ此困難ハ伯自身モ全ク認ムル所ナリ依テ賠償ノ問題ヲ如何ニスヘキカ
トノ疑問ニ對シ目下腦裡ニ描ケル一案ハ此問題ヲ舉ケテ海牙府ニ於ケル常

外務省

置仲裁々判所ニ提出シ之ヲシテ各國適當ニ受クヘキ賠償ノ額ヲ決定セシム
ルノミナラス又其賠償ニ應スルニ必要ナル資金ヲ得ルノ方法ヲモ決定スル
ノ權限ヲ與フルニ在リ斯ノ如クシテ各國ノ要求ヲ調和セントスルニツキ較
モスレハ意見ノ相違ヨリ發生セントスル紛擾ヲ避クヘシト云ヒ尙ホ語ヲ加
ヘテ曰ク將來ノ擔保トシテ各國ハ大沽及北京間ノ交通ノ安全ヲ維持スルタ
メ直隸省ニ於テ暫時軍隊ヲ留メ置クヘシ是ハ必要ノ去リタル曉ニハ直ニ撤
回セサルヘカラス併シ清國ノ内政ニ永遠干涉スルノ途ヲ開クカ如キ擔保ハ
決シテ同意スルコト能ハスト以上ノ意見ハ伯カ一個人ノ意見トシテ述ヘタ
ル所ナレトモ從來屢報告シ且上文ニモ列舉セル二大要點ヲ根本トシテ執レ
ル露國政略ト全ク一致セルモノナリ(十月一日附電報第四十六號)
今後本事件ノ善後策ニ就キテ露國ノ執ルヘキ政略ハ上來縷陳シ來リタル所
ノ趣意ニヨリテ現ハレ來ルヘク即チ秩序回復罪人所罰ノ如キ問題ハ可成速ニ
纏メシメンコトニ盡力シ損害賠償ニ關シテモ亦各國ト共同シテ被リタル所
ノ損害即チ直隸地方ニ於ケル騷擾ノタメ生シタル損害ノ賠償ニ就キテハ各國
ト共同シテ談判ヲ爲スコトヲ厭ハサルヘシ然レトモ之ト同時ニ露國カ單ニ
滿州地方ニ於テ蒙リタル損害ノ賠償ハ如何ニシテ結局セシムヘキヤハ尙ホ
一ノ疑問ニシテ或ハ獨リ特別ニ清國政府ト交渉シテ東清鐵道布設及黑龍江

航行ノ安全ヲ計ル爲メ必要ナリトノ口實ヲ以テ特殊ノ利益ヲ請求スルコト
アルヤモ知ルヘカラス是甚ダ注意ヲ要スル所ニシテ之ニ對シ我政府ニ於テ
ハ今回ノ清國事件ニ關聯セル各國ノ諸要求ハ其性質ノ何タルヲ問ハス又其
關係スル地方ノ執レタルヲ區別セス悉ク之ヲ一纏トシテ清國政府ニ提出ス
ルニ至ルヘキ様手段ヲ執ラル、コト必要ナルヘシト考フ

第二 滿州ニ關スル露國政府ノ處置

露國ハ滿州ニ於テ鐵道ノ經營ニ非常ノ力ヲ用ヒ孜孜トシテ其成功ヲ急ケル
ニ拘ハラス其安全ヲ保證スヘキ兵備ハ從來甚不完全ニシテ鐵道布設線路ノ
警衛トシテハ僅ニ數千ノ鐵道掩護隊ト稱スル兵(會社)ノ費用ニテ雇入ル、
モノニシテ歐洲露西亞ニ於テ豫備又ハ歸休中ノ兵ヨリ募集シ編制シテ專ラ
鐵道工事ノ安全ヲ護ルニ任セシムルモノ)ヲ數個所ニ配置セルニ止マリ又旅
順口ノ兵備モ尙經營ノ半途ニアリ殊ニ滿州ニ隣セル黑龍江州沿海州ニ於ケ
ル兵備ノ不完全ナルコト勿論ナルニヨリ陸軍省ニ於テハ夙ニ此地方ノ兵
備ヲ完整セシメントノ計畫ヲ備ヘ序ヲ追テ其實行ヲ務メタリシカ今回ノ騷
擾ニヨリ同地方兵備ノ薄弱ナルコト實際ニ著シク現ハレタレハ陸軍大臣ハ此
機ニ乘ジ急激ニ兵備ヲ増加センコトヲ計畫シ同地方ノ軍團諸旅團ニ動員ヲ
行ヒ更ニ歐洲ヨリ五旅團ノ兵ヲ送ラントシタルモ前項續述ノ如ク三個旅團

外務省

ヲ送ルニ止メタリ今ヤ滿州ニ於テハ四方ヨリ途ヲ分ツテ派遣セラレタル討伐
隊着々征定ノ功ヲ奏シ奉天府ノ占領ヲ終トシテ各隊皆連絡ヲ通シタル結果
トシテ滿州内ノ要處ハ悉ク露國軍ノ占領スル所トナレリ而シテ此等ノ軍ヲ
向後如何ニ處分スヘキカニ關シ本月十二日ノ官報ヲ以テ公ニシタル所ノ勅命
ニヨレハ目下直隸ニ在ル軍隊及歐洲ヨリ派遣セル三個旅團ハ動員ノ儘ニ據置
キ滿州ニ入り即チ露國ノ國境ヲ越ヘタル軍隊ハ司令官ガ必要ト認ムルモノ
ニ限り戰時人員ノ儘ニ止メ其他國境ヲ越エザリシ軍隊ハ某々部隊ヲ除クノ
外之ヲ平時人員ニ復セシムヘシ又第二段ノ處置トシテ清國政府ト談判ノ進行
上又清國ニ於テ政治上安寧秩序ノ回復セラレタル上時機ニ於テ差支ナシト
認メラル、ニ至ラハ其時尚戰時編制ニ在ル諸隊ハ悉ク平時人員ニ復セシム
又歐洲ヨリ派遣シタル軍隊ハ之ヲ召還スヘシトアリ(十月十三日附電報第百
四十八號)

滿州ヲ此際公然其領土ト爲スカ如キハ露國現今ノ政略ニ反シ又再三宣言シ
タル所ニモ戻ルヲ以テ決シテ之ヲ爲サ、ルヘシ然レトモ現今同地ニ駐屯セ
ル派遣軍ヲ果シテ悉ク撤回スヘキヤ否ヤハ尙一ノ疑問ナリトス今後東清鐵
道ノ安全ヲ保護スルニツキテ從來爲シ來レル設備ヲ以テ足ルヘキニアラス
會社ノ雇兵タル鐵道掩護隊ハ今後増加シテ約一萬二千トナサン計畫ニテ目

下之ニ當ルヘキモノヲ歐洲露西亞ニ於テ募集シ續々滿州地方ヘ向ケ送り居
レハ右兵數ハ滿州ニ永駐スルコト、ナルヘク此外前項末段ニ於テ述ヘタル
如キ鐵道工事及河川航行ノ安全ヲ保護スルニ必要ノ便宜ヲ特ニ獲得スルコ
トアラバタトモ今回ノ事件落着ノ後露國ハ滿州領内ニ入ラシメタル正式ノ
兵ヲ表面撤回スルコトアリトモ實際上滿州ハ全ク露國ノ兵力ノ下ニ立ナ之ヲ占
領シタルト毫モ異ナラサル狀態トナルヘシ斯ノ如キ實勢ナルヲ以テ我ニ於
テモ之ニ對シ我利益ヲ保護スル爲メ必要ノ措置ヲ爲スコト最モ肝要ナリト信ス

第三 清國事件ニ關聯シテ日本ニ對スル露國ノ態度

第一項ニ於テ詳述シタルカ如ク露國ハ今回清國事件ニ就キテ成ルヘク他國
カ深ク之ニ立入ルノ域ニ至ラシメサランコトヲ務メ以テ將來清國問題ニ關
シ列國協同策ノ行ハレサランコトヲ欲シタリ然レトモ之ト同時ニ清國ニ對
スル日本ノ地位ハ充分ニ考量シ地理及利害ノ關係ヨリ日本カ清國問題ニ手
ヲ出スノ已ムヲ得サルヲ認識セルノミナラス日本現在ノ軍備ニ對シテ露國カ
絶東ニ於ケル陸軍ノ設備不完全ナルコト及其東洋艦隊ハ日本現在ノ海軍ニ
對シ到底優勢ヲ占ムルコト能ハサルコトヲ熟知セリ故ニ今回ノ清國事件ニ
關シ清國ニ於テ兵力上露國ト頡頑スルコトヲ得ヘキ唯一ノ國ハ我日本ナル
コトヲ認メ可成之ト衝突ヲ來スコトヲ避ケンコトヲ務メタリ故ニ今回ノ驕

外務省

ニ對シ日本カ出兵スルコトニ對シテ露國ハ最初ヨリ毫モ之ヲ妨ケントス
ルノ意ナカリシノミナラス清國ニ關シテ日露兩國ハ最大ナル利害關係ヲ有
シ且必要ノ兵數ヲ最モ迅速ニ派遣シ得ヘキ國ナレハ此兩國ハ互ニ共同シテ匪
徒ヲ鎮定スヘシトノ意見ハ屢露國政府部内ノ有力者ヨリ語リタル所ナリ(六
月二十一日附電報第五十五號同二十四日附電報第五十八號同二十五日附電
報第六十一號同三十日附電報第六十五號及七月十一日附電報第七十五號聯
合軍天津ヲ占領セシ以來ハ日本軍最優勢トナリ北進ヲ始メテヨリノ作戰ノ計
畫及實行ハ毎ニ日本カ主トナリテ行ハレ以テ着々征討ノ歩ヲ進メ時機ヲ失
ハス北京ヲ救援スルニ至リタル結果日本軍ノ價值ハ列國ノ認ムル所トナリ
露國陸海軍部内ノ有力者モ日本軍隊ヲ賞賛シ之ニ重キヲ置クコト一段ヲ加
ヘ從テ日本ニ對シテ聊カ畏敬ノ念ヲ生シタルト同時ニ自國將來ノ施設ニ戒
心ヲ加フルノ姿ナレハ我ニ於テモ之ヲ考慮シテ向後ノ施設ニ一層深ク注意
ヲ加フルコト專要ナリト信ス

右申進候敬具